

2025 年 8 月

食料安全保障月報

(第 50 号)



令和 7 年 8 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年 6 月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2025 年8月食料安全保障月報(第 50 号)

目 次

概要編

I	2025 年8月の主な動き	1
II	2025 年8月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV	2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V	今月の注目情報「ウクライナの生産・輸出動向」	5

(資料)

1-1~3	穀物等の主要輸出国の生産量(過去 10 年平均との増減比較)	1 0
1-4	穀物等の国際価格の動向	1 3
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 4
3	穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	1 5
4	加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	1 7
5	食品小売価格の動向	2 1
6	海外の畜産物の需給動向(ALIC 提供)	2 2
7	FAO 食料価格指数	2 4

今月のコラム

「ベトナムの食料事情:農林水産業及び食料安全保障政策」	2 5
-----------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2025/26 年度の輸出量は前年度から 5.9%増の見込み
	＜カナダ＞	2025/26 年度の生産量は前年度並みの見込み(AAFC)
	＜豪州＞	2025/26 年度の WA 州の生産量は上方修正され 11.5 百万トンの見込み(GIWA)
	＜EU27＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 14.0%増の見込み(EC)
	＜ロシア＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 2.3%増の見込み
	＜ウクライナ＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 6.0%減の見込み
	＜中国＞	2025/26 年度の生産量は前年度と同水準の見込み

2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.6%増加する見込み	
	＜ブラジル＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.8%減少する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み	
	＜ウクライナ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 19.4%増加する見込み	
	＜中国＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03%増加する見込み	
3	コメ	15
	＜タイ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.7%減少する見込み	
	＜米国＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 6.1%減少する見込み	
	＜中国＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜インド＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.7%増加する見込み	
	＜ベトナム＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 2.4%減少する見込み	
II	油糧種子	
	大豆	21
	＜米国＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%減少する見込み	
	＜ブラジル＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 3.6%増加する見込み	
	＜カナダ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 6.1%減少する見込み (AAFC)	
	＜中国＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%増加する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 4.7%減少する見込み	
	(参考1) 本レポートに使用されている各国の市場年度について (2025/26 年度)	27
	(参考2) 単位換算表	27
	(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	28

【利用上の注意】

表紙写真: フランス共和国イル・ド・フランス地域圏ヴァル・ドワーズ県ショシー

収穫作業が進む小麦畑。今年度は水分量が少ない高品質な小麦が収穫された。
(2025 年 7 月 12 日)

(概要編)

I 2025 年8月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

8月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2025/26 年度の状況について、品目別にみると、小麦については、豪州、カザフスタン、パキスタンで収穫面積・単収ともに前年度より減少、イランで単収が減少し生産量が減少するものの、EU、インドで収穫面積・単収ともに前年度より増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年3月に史上最高を更新した小麦の国際相場は、同年8月には侵攻前の水準まで低下したものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意(黒海穀物イニシアティブ)については2023 年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、米国、ウクライナで収穫面積・単収ともに前年度より増加、アルゼンチンで収穫面積が増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

大豆については、アルゼンチン、米国で収穫面積が前年度より減少するものの、ブラジルで収穫面積・単収ともに増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、主に肉や植物油の価格上昇等により、6月の 128.0 から、7月(最新値)は 130.1 と上昇(参考:2024 年7月 120.9、2023 年7月 124.4、2022 年7月 141.6、2021 年7月 124.4、2020 年7月 93.8)。海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近5カ年の平均値より約1割高い水準で推移。



写真:カナダ・アルバータ州セント・ヴィンセントの小麦畑。品質は良好。

撮影日:2025 年8月 15 日

撮影者:Lynn Dargis



写真:ブラジル・マツグロソ州のとうもろこし畑の収穫作業の様子。単収は良好。

撮影日:2025 年7月 31 日

撮影者:Rafael Rohenkohl

ウクライナの生産・輸出動向

USDA の8月需給報告によれば、2025/26 年度のウクライナの小麦の生産量は、単収の減少を受け、前年度より6%減少し 2,200 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の減少等を受け、前年度より2%減少し 1,550 万トンとなる見込み。2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに増加することから、前年度より19%増加し 3,200 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の増加等を受け、前年度より21%増加し 2,550 万トンとなる見込み。

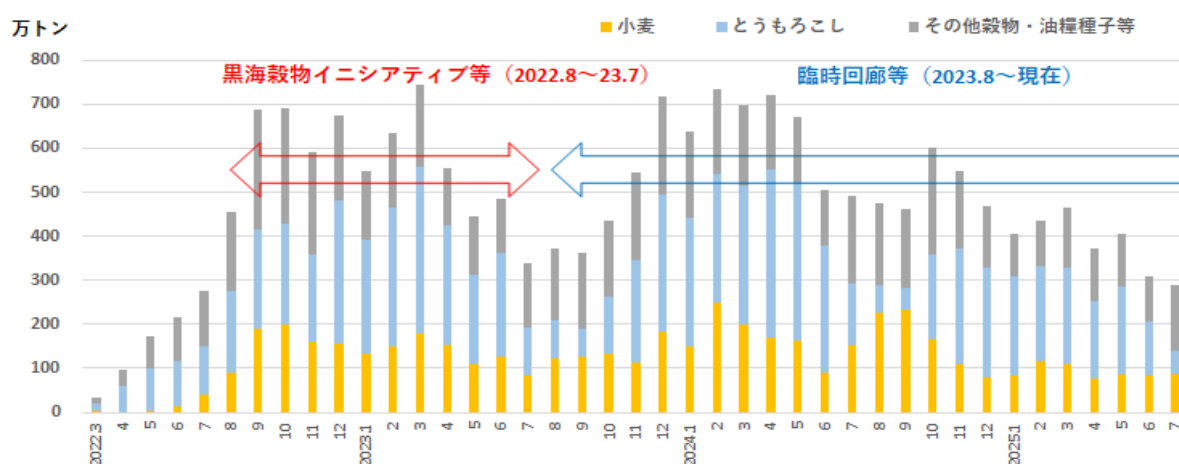
現地情報会社によれば、2025 年7月末現在、2025/26 年度の秋播き作物(冬小麦)の収穫作業は終了した。昨年から続く高温乾燥による土壌水分量の不足等の影響により、不稔率は10~20%、一部地域では 30~50%となっている。春播き作物(春小麦)は黄熟期から完熟期を迎えており、一部地域では収穫作業が進展している。とうもろこしについては、子葉形成期(13~21 葉期)から乳熟期を迎えており、既に収穫作業が始まった地域もある。中央部の一部地域では害虫被害や生育不良、西部、北部では豪雨による倒伏被害の報告がある。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出(鉄道又はトラック)は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

(参考)ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022 年3月~2025 年7月)



出典:旧農業政策食料省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成

注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 EU:2025/26 年度のとうもろこしの生産量は減少する見込み

USDA によれば、2025/26 年度の EU のとうもろこし生産量は 5,800 万トンと、前月予測から3%下方修正され、前年度から2%減少し、過去5年平均を7%下回る見込み。収穫面積は 810 万ヘクタールと、前月予測から2%下方修正され、前年度から8%減少し、過去5年平均を9%下回る見込み。単収は 7.21 トン/ヘクタールと、前月予測から1%下方修正され、前年度から6%減少し、過去5年平均を2%上回る見込み。

EU ではとうもろこしの作付面積が近年減少傾向にある。これは、多くの農家が、季節的に水分量に恵まれる冬作物や、干ばつに強いヒマワリへ作付けをシフトしていることによる。この傾向は、灌漑設備が限られ、高温乾燥型の天候が頻発する南東ヨーロッパで最も顕著となっている。夏の高温乾燥はしばしば長期化し、とうもろこしの作柄を決定する受粉期に高温乾燥型の天候となった場合は、その作柄に壊滅的な影響を与える。2024 年の夏は極度の高温乾燥に見舞われ、ルーマニアとブルガリアは史上最低の生産量を記録した。2025 年は、春先の降雨量が平年を上回り土壌水分量を押し上げたことから、生産量増の期待が高まったが、降雨は続かず、7月の受粉期にはバルカン半島を高温乾燥型の天候が襲った。ルーマニアとブルガリアの今年度のとうもろこしの生産量は、前年度よりは増加が見込まれるものの、作柄は良くない。

図:EU の降水量(平年対差)(2025 年3月)

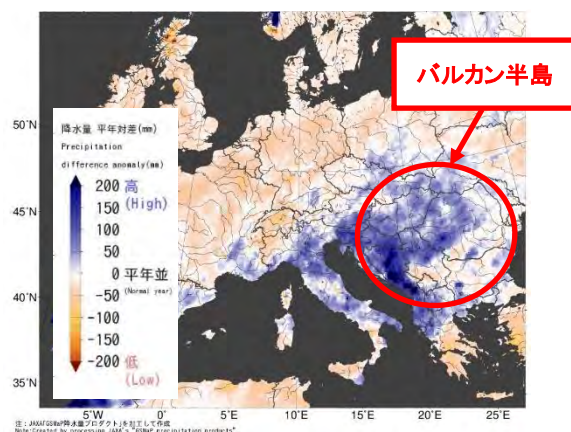
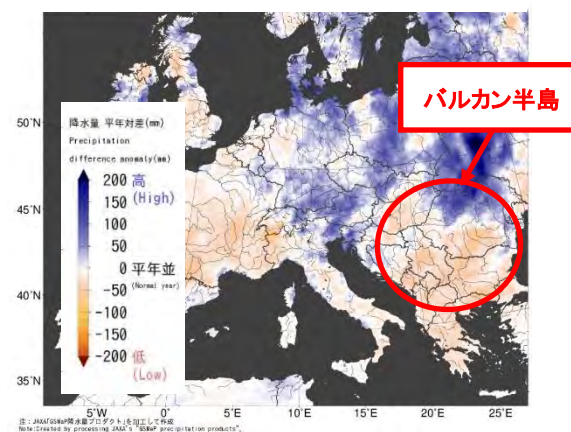


図:EU の降水量(平年対差)(2025 年7月)



出典:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

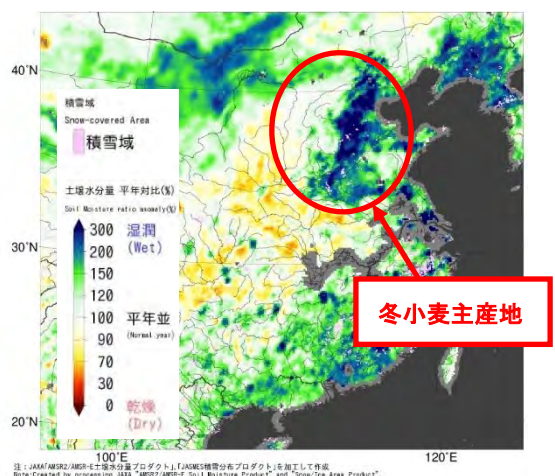
2 中国:2025/26 年度の小麦の生産量は平年並みの見込み

USDA によれば、2025/26 年度の中国の小麦生産量は1億 4,000 万トンと、前月予測から1%下方修正され、前年度から 0.1%減少し、過去5年平均を2%上回る見込み。収穫面積は 2,360 万ヘクタールと、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.1%増加し、過去5年平均を0.3%上回る見込み。単収は 5.93 トン/ヘクタールと、前月予測から1%下方修正され、前年度から0.2%減少し、過去5年平均を2%上回る見込み。

中国の冬小麦は、中国の小麦生産量の95%を占める。9月中旬から 10 月末にかけて作付けされ、翌年5月中旬から6月末にかけて収穫される。春小麦は3月から4月に作付けされ、8月から9月に収穫される。

冬小麦の主産地である河南省、河北省、山東省、安徽省、江蘇省の作付期の土壌水分量は、平年並みなし平年を上回る水準で推移した。その後、気象条件は平年並みなし平年より良好で推移し、作物は順調に生長した。

図:中国の土壌水分量(平年対比)
(2024 年9月 16~30 日)



出典:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

II 2025 年8月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7月末、190ドル/トン台前半で推移。8月に入り、北半球における冬小麦の収穫進展等を受けて下落し、8月中旬現在、180ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、7月末、155ドル/トン台半ばで推移。8月に入り、米国農務省需給報告における米国の生産量の大幅な上方修正等を受けて140ドル/トン台半ばまで下落したものの、大豆価格の上昇に連れて上昇し、8月中旬現在、140ドル/トン台後半で推移。

コメは、7月末、400ドル/トン台前半で推移。8月に入り、引き続きアジアの主要市場における需要減退やインド産米等との競合を受けて下落し、8月中旬現在、390ドル/トン台前半で推移。

大豆は、7月末、350ドル/トン台半ばで推移。8月に入り、米国農務省需給報告における米国の生産量の下方修正等を受けて上昇し、8月中旬現在、370ドル/トン台前半で推移。

(注)小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント

2025/26 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.6%増の 29.20 億トン。消費量は、前年度より 1.5%増の 29.26 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り 25.9%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、29.20 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、29.25 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加し、5.18 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.56 億トンと前年度より減少、期末在庫率も前年度より減少する見込み。

(注:数値は8月の USDA「PS&D」による)

IV 2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

2025/26 年度の油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.90 億トン。消費量は前年度を上回り 6.87 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り 21.0%となる見込み。

(注:数値は8月の USDA「PS&D」等による)

V 今月の注目情報: ウクライナの生産・輸出動向

2025/26年度のウクライナ産小麦の生産量は、長期の高温乾燥により単収が減少することから、前年度に比べ6%減少し2022/23年度以来の低い水準となる見込み。輸出については、ロシアのウクライナ侵攻以降、EU向けのシェアが拡大したが、「臨時回廊」が確立され、海上アクセスの安定に伴い、アジア諸国等の侵攻前の市場への回帰がみられる。

2025/26年度のウクライナ産小麦及びとうもろこしの生産・生育状況と、2022年のロシアのウクライナ侵攻から現在に至るウクライナの輸出動向についてまとめた。

注: 文中の「2025/26 年度」等は市場年度で、ウクライナ的小麦は 2025 年7月から 2026 年6月、とうもろこしは 2025 年 10 月から 2026 年9月。国や作物によって異なる(品目別需給編参照)。

1 ウクライナ産小麦・とうもろこしの生産動向

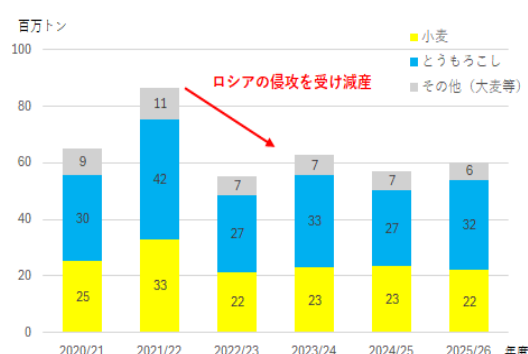
(1) 小麦の生産動向

USDA によれば、2025/26 年度の小麦の生産量は 2,200 万トンと、前月予測から変更はなく、前年度から 6%減少する見込み。収穫面積は 550 万ヘクタールと、前月予測から 10%上方修正され、前年度から 6%増加する見込み。単収は 4.00 トン/ヘクタールと、前月予測から 9%下方修正され、前年度から 11%減少する見込み。2025/26 年度の実産量は、ロシアのウクライナ侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、2,793 万トン)と比較すると 21%の減産となる(図1)。なお、現在、ウクライナは紛争中であり、USDA のデータは国全体を反映していない。クリミアのデータについては、ロシア統計局の公表資料から抽出している。

ウクライナは主に冬小麦を栽培しているが、今期、冬小麦の作付適期である 2024 年9月中旬から 10 月にかけて、乾燥型の天候により土壌水分量が不足し、作付け後、長期間にわたって発芽がみられないケースがみられた(図2)。作付けから長期にわたり高温乾燥による土壌水分量の不足、遅霜、乾燥した熱風、気温上昇等により、作柄が悪化した。2025 年6月下旬より収穫作業が開始されているが、ウクライナ西部及び北部地域においては、7月下旬から8月上旬にかけて長雨に見舞われ、すす病などにより小麦の品質悪化が懸念されている。これらの小麦は飼料用として使用できるものの、飼料用としても品質が悪いとみなされる(図3)。

現地情報会社によれば、8月7日現在の小麦の収穫進捗率は 74%と、前月 10 日(9%)から大幅に進展した。冬小麦の収穫は終了しており、不稔率は 10～20%、一部地域では 30～50%となっている。

図1 ウクライナの穀物生産量の推移



出典: USDA「PS & D」をもとに農林水産省で作成

図2 ウクライナの土壌水分量(平年対比)
(2024 年 9 月 16～30 日)

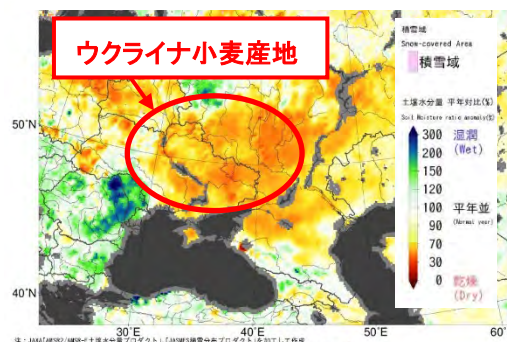
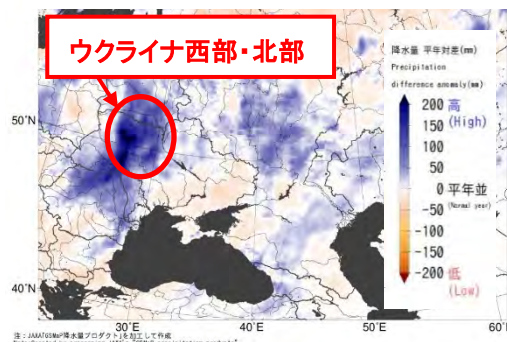


図3 ウクライナの降水量(平年対差)
(2025 年 7 月 16～31 日)



出典: 農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

(2)とうもろこしの生産動向

USDA によれば、2025/26 年度のとうもろこしの生産量は 3,200 万トンと、前月予測から5%上方修正され、前年度から 19%増加する見込み。収穫面積は 440 万ヘクタールと、前月予測から5%上方修正され、前年度から7%増加する見込み。単収は 7.27トン/ヘクタールと、前月予測から 0.1%上方修正され、前年度から 11%増加する見込み。ロシア侵攻前の過去5年平均(3,365 万トン)と比較すると5%の減産となる(図1)。

ウクライナのとうもろこしは、4月から5月にかけて作付けされるが、概ね適切な土壌水分量となり、作付作業は順調に進展した。6月以降、乾燥型の天候が続いており、現在、中央部及び東部の一部地域で土壌水分量が不足している(図4)。

現地情報会社によれば、7月末現在、子葉形成期から乳熟期を迎えており、既に収穫が始まった地域もある。7月下旬の豪雨により、西部及び北部地域では倒伏被害が報告されている。

2 ウクライナ産小麦・とうもろこしの輸出動向

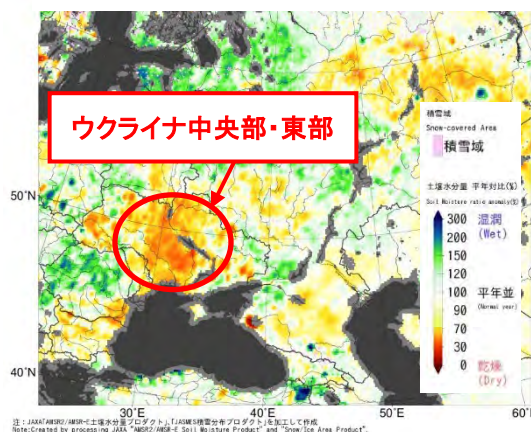
(1)小麦の輸出動向

USDA によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、期首在庫量の減少を受け、前年度から 15%減少し 1,575 万トンとなる見込み。ロシア侵攻前の過去5年平均(1,810 万トン)と比較すると 13%の減少となる(図5)。

2024 年1月から 12 月までの小麦の輸出量は 2,067 万トンで、国別にはスペイン 568 万トン、インドネシア 252 万トン、エジプト 191 万トン、アルジェリア 135 万トンの順となっている(表1)。ロシア侵攻前は、主にアジア地域及びアフリカ諸国向けに輸出されていたが、ロシア侵攻後、海上輸送が困難となったことや、EU によるウクライナ支援の一環として、ウクライナの一部の農産品に対して輸入関税及び関税割当を停止する「自主貿易措置(ATMs)」が実施されたことにより、2022 年以降、EU 諸国向けへの輸出が増加している。2022 年8月、黒海穀物イニシアティブにより黒海経由の輸出が再開、2023 年8月以降は「臨時回廊」が確立され、海上アクセスが安定したことから、2024 年はアジア諸国等の侵攻前の市場への回帰がみられる(図6)。

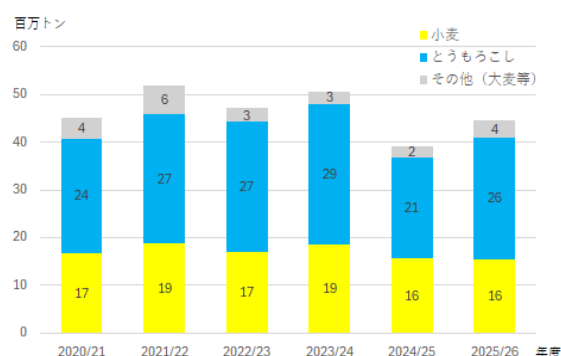
図4 ウクライナの土壌水分量(平年対比)

(2025 年 7 月 1~15 日)



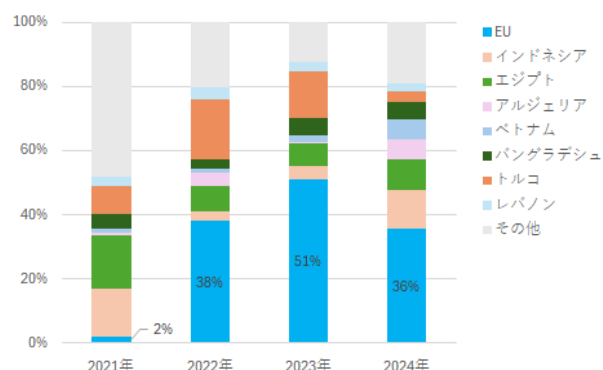
出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

図5 ウクライナの穀物輸出量の推移



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

図6 ウクライナの EU 向け小麦輸出量のシェア



出典：S&P Global Intelligence をもとに農林水産省が作成

表1 ウクライナの小麦の輸出量及び輸出先

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2021年1月～12月 (ロシア侵攻前)			2022年1月～12月			2023年1月～12月			2024年1月～12月		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
エジプト	331.4	16.5	トルコ	211.7	18.9	スペイン	398.9	24.7	スペイン	568.2	27.5
インドネシア	304.0	15.2	ルーマニア	145.8	13.0	トルコ	233.4	14.5	インドネシア	251.6	12.2
トルコ	176.6	8.8	スペイン	115.4	10.3	ルーマニア	227.1	14.1	エジプト	191.3	9.3
パキスタン	134.4	6.7	エジプト	87.3	7.8	エジプト	116.4	7.2	アルジェリア	134.9	6.5
バングラデシュ	84.9	4.2	ポーランド	58.1	5.2	バングラデシュ	89.3	5.5	ベトナム	127.4	6.2
モロッコ	84.7	4.2	アルジェリア	48.8	4.3	インドネシア	66.4	4.1	バングラデシュ	107.5	5.2
イエメン	79.7	4.0	レバノン	42.3	3.8	イタリア	59.6	3.7	チュニジア	84.7	4.1
サウジアラビア	71.2	3.6	イタリア	39.7	3.5	レバノン	42.9	2.7	タイ	80.3	3.9
チュニジア	64.6	3.2	インドネシア	34.6	3.1	ベトナム	34.8	2.2	トルコ	74.2	3.6
レバノン	63.7	3.2	バングラデシュ	32.4	2.9	ポーランド	31.0	1.9	イタリア	70.0	3.4
その他	609.7	30.4	その他	306.3	27.3	その他	312.3	19.4	その他	376.4	18.2
合計	2,004.8	100.0	合計	1,122.3	100.0	合計	1,611.8	100.0	合計	2,066.5	100.0

出典: S&P Global Intelligence をもとに農林水産省が作成 ※緑はアジア、青は EU

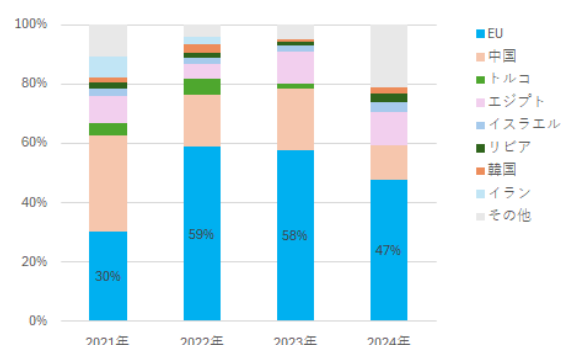
注: 四捨五入による誤差のため、シェアの合計が 100%にならない場合がある。

(2) とうもろこしの輸出動向

USDA によれば、2024/25 年度のとうもろこしの輸出量は、生産量の減少を受け、前年度から 29% 減少し、2,100 万トンとなる見込み。ロシア侵攻前の過去 5 年平均 (2,563 万トン) と比較すると 18% の減少となる(図5)。

2024 年1月から 12 月までのとうもろこしの輸出量は 2,963 万トンで、国別にはスペイン 524 万トン、トルコ 355 万トン、中国 352 万トン、エジプト 332 万トン、オランダ 293 万トンの順となっている(表2)。ロシア侵攻後、小麦と同様に EU 諸国向けの輸出が増加したが、2024 年は侵攻前の市場への回帰がみられる(図7)。

図7 ウクライナの EU 向けとうもろこし輸出量のシェア



出典: S&P Global Intelligence をもとに農林水産省が作成

表2 ウクライナのとうもろこしの輸出量及び輸出先国

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2021年1月～12月 (ロシア侵攻前)			2022年1月～12月			2023年1月～12月			2024年1月～12月		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	791.9	32.1	中国	441.5	17.5	中国	544.0	20.7	スペイン	524.3	17.7
スペイン	246.6	10.0	ルーマニア	353.7	14.0	スペイン	396.1	15.1	トルコ	355.3	12.0
オランダ	227.4	9.2	スペイン	276.2	11.0	ルーマニア	283.7	10.8	中国	351.9	11.9
エジプト	221.0	9.0	ポーランド	210.0	8.3	エジプト	283.7	10.8	エジプト	332.3	11.2
イラン	167.9	6.8	イタリア	143.8	5.7	イタリア	246.2	9.4	オランダ	292.8	9.9
トルコ	107.5	4.4	オランダ	140.9	5.6	オランダ	179.7	6.8	イタリア	288.4	9.7
イタリア	89.0	3.6	トルコ	139.5	5.5	ポルトガル	83.9	3.2	イスラエル	101.1	3.4
イスラエル	67.3	2.7	ハンガリー	133.6	5.3	ドイツ	64.4	2.5	リビア	78.2	2.6
ポルトガル	64.8	2.6	エジプト	125.6	5.0	ハンガリー	63.8	2.4	韓国	68.4	2.3
ベルギー	63.4	2.6	韓国	70.7	2.8	イスラエル	55.8	2.1	ポルトガル	61.7	2.1
その他	420.8	17.1	その他	482.1	19.1	その他	427.6	16.3	その他	508.7	17.2
合計	2,467.5	100.0	合計	2,517.7	100.0	合計	2,628.8	100.0	合計	2,963.2	100.0

出典: S&P Global Intelligence をもとに農林水産省が作成 ※緑はアジア、青は EU

注: 四捨五入による誤差のため、シェアの合計が 100%にならない場合がある。

(3) 臨時回廊による輸出とEUの自主貿易措置

2022年2月のロシア侵攻後、ウクライナの穀物輸出は一時的に途絶えたものの、国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等からの輸出が再開された。同イニシアティブはロシアが離脱する2023年7月17日まで続いた。同イニシアティブ停止以降は、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する「臨時回廊」が確立され現在に至る（図8）。

ロシア侵攻後、EUによるウクライナ支援の一環として、ウクライナの一部の農産品に対して輸入関税及び関税割当を停止する「自主貿易措置（ATMs）」が実施された。ATMsは2022年6月の発効以来、1年毎に延長されてきたが、2025年6月5日、延長されずに失効することとなった。ATMsに対しては、発効当初よりEU域内の農畜産業への影響が大きいとして農畜産業界から反発が大きかったという背景がある。ATMs失効後、EUは2014年に締結された「深化した包括的自由貿易協定（DCFTA）」に基づき、ウクライナ産の一部の農産品に対して関税割当制度の適用を再開した。

有効期限は2025年6月6日から12月末日まで。割当量は年間基準量の7/12となる。これは、6月から12月までの7か月を意味する。穀物については、小麦が58.3333万トン（年間基準量100万トン）、とうもろこしが37.9167万トン（同65万トン）、大麦が20.4167万トン（同35万トン）。なお、食肉、卵、乳製品についての割当量も公表された。

2025年6月30日、EUとウクライナはDCFTAの見直しについて原則合意した。この合意により、一部の農産品について割当数量の見直しが行われ、小麦については、年間基準量100万トンが130万トンに、とうもろこしについては65万トンから100万トンに、大麦については35万トンから45万トンに引き上げられた。今後、EU理事会の提案及びウクライナ・EU貿易構成委員会（ACTC）での正式採択を経て、発効する見通し。

なお、2024年のウクライナの対EU輸出実績は、小麦で約736万トン、とうもろこしで約1,403万トン、大麦で約69万トンとなっており、割当数量を大幅に上回っている（表3）。

表3 ウクライナ産穀物に対する関税割当数量（一部）

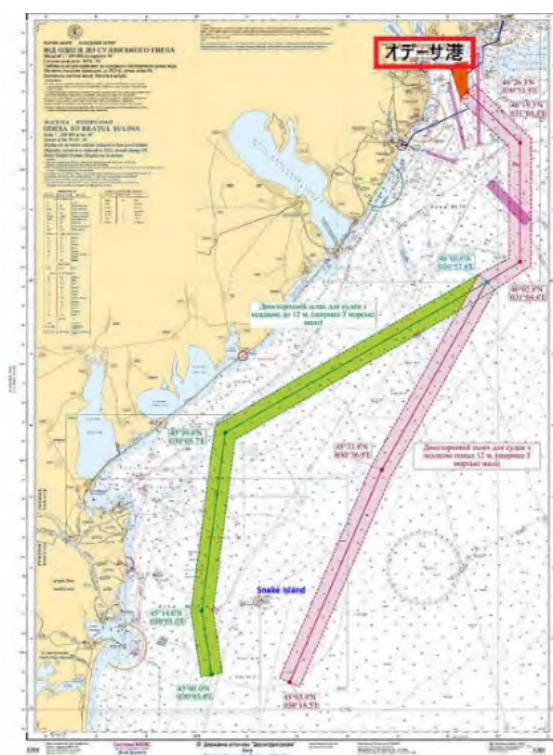
（単位：トン）

品 目	現在の割当量 （DCFTA）	変更後の割当量 （6月30日合意内容）	（参考）2024年のウクライナの対EU輸出力	
			輸出力	参照HSコード
小麦等	1,000,000	1,300,000	7,357,599	HS1001.99
大麦等	350,000	450,000	688,240	HS1003.90
とうもろこし等	650,000	1,000,000	14,031,304	HS1005.90
小麦粉、大麦粉、とうもろこし粉	（各穀物関税割当に含む）	30,000	29,321	HS1101.00 HS1102.90 HS1102.20

出典：欧州委員会公表資料、S&P Global Intelligence 等をもとに農林水産省で作成

図8 オデーサ港から出港のルート

ピンクは黒海穀物イニシアティブ、緑は臨時回廊



出典：現地調査会社調べ

3 今後の動向

USDA によれば、ウクライナの 2025/26 年度の小麦輸出量は、前年度から2%減少し 1,550 万トンとなる見込み。報道によれば、ロシア侵攻以来、ウクライナはEU 諸国向けを中心に輸出を行ってきたが、2025 年6月6日、DCFTA に基づく関税割当制度が再開したことにより、今後は、EU への輸出は減少するとみられる。ウクライナ産小麦の輸入量で第1位のスペインは、関税割当制度の再開や自国生産量の増加に伴い小麦輸入量を減少させると見込まれる。第2位のインドネシアについては、7月 16 日、米国・インドネシア間の関税合意の一環として、2026~2030 年の5年間に米国から年間 100 万トン以上の小麦を輸入すると約束した。このため、インドネシア市場におけるウクライナ産のシェアは大きく失われると予想される。第3位のエジプトについては、前年度に比べ生産量が増加するロシアとの厳しいシェア争いが展開されるとみられている。

USDA によれば、2025/26 年度のとうもろこしの輸出量は、生産量の増加に伴い前年度から 21%増加し 2,550 万トンとなる見込み。報道によれば、ウクライナ産とうもろこしの大口顧客であるトルコについて、国内の養鶏産業の成長が期待されるため、輸入量が増加すると予想されている。今後は、小麦、とうもろこしともに、中東やアフリカ、アジア諸国に向けて輸出先の多角化を図っていくとみられている。

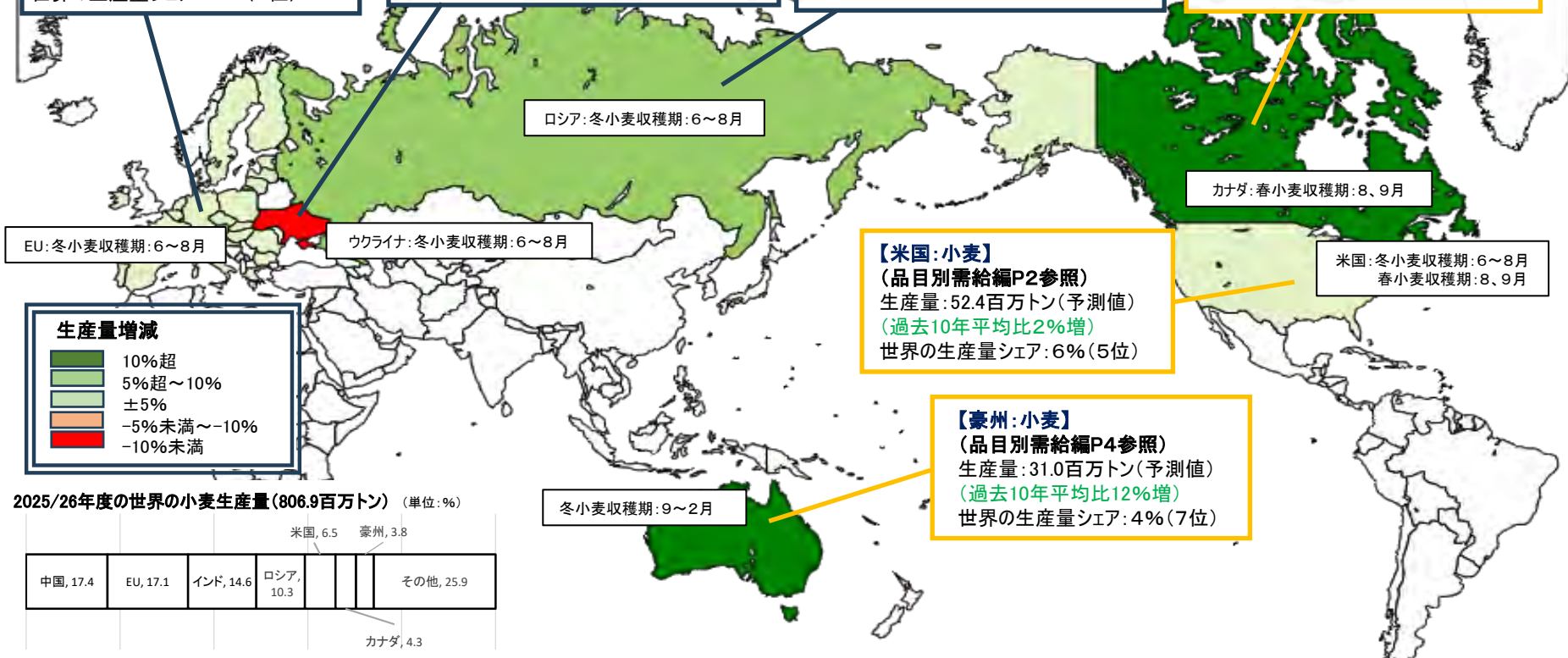
資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(8月版)

【EU:小麦】(品目別需給編P5参照)
生産量:138.3百万トン(予測値)
(過去10年平均比3%増)
世界の生産量シェア:17%(2位)

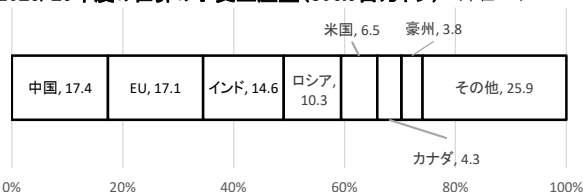
【ウクライナ:小麦】(品目別需給編P7参照)
生産量:22.0百万トン(予測値)
(過去10年平均比16%減)
世界の生産量シェア:3%(9位)

【ロシア:小麦】(品目別需給編P6参照)
生産量:83.5百万トン(予測値)
(過去10年平均比6%増)
世界の生産量シェア:10%(4位)

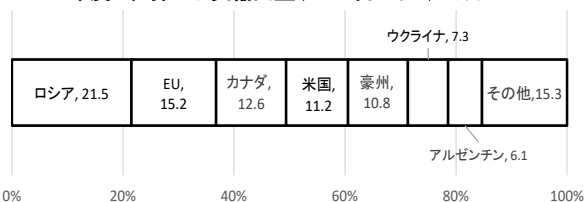
【カナダ:小麦】(品目別需給編P3参照)
生産量:35.0百万トン(予測値)
(過去10年平均比11%増)
世界の生産量シェア:4%(6位)



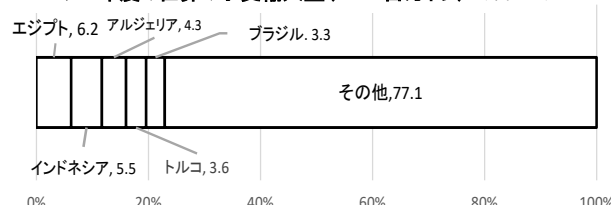
2025/26年度の世界の小麦生産量(806.9百万トン) (単位:%)



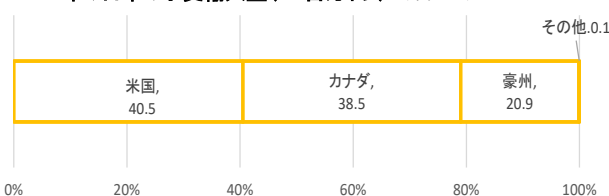
2025/26年度の世界の小麦輸出品(213.5百万トン) (単位:%)



2025/26年度の世界の小麦輸入品(209.5百万トン) (単位:%)

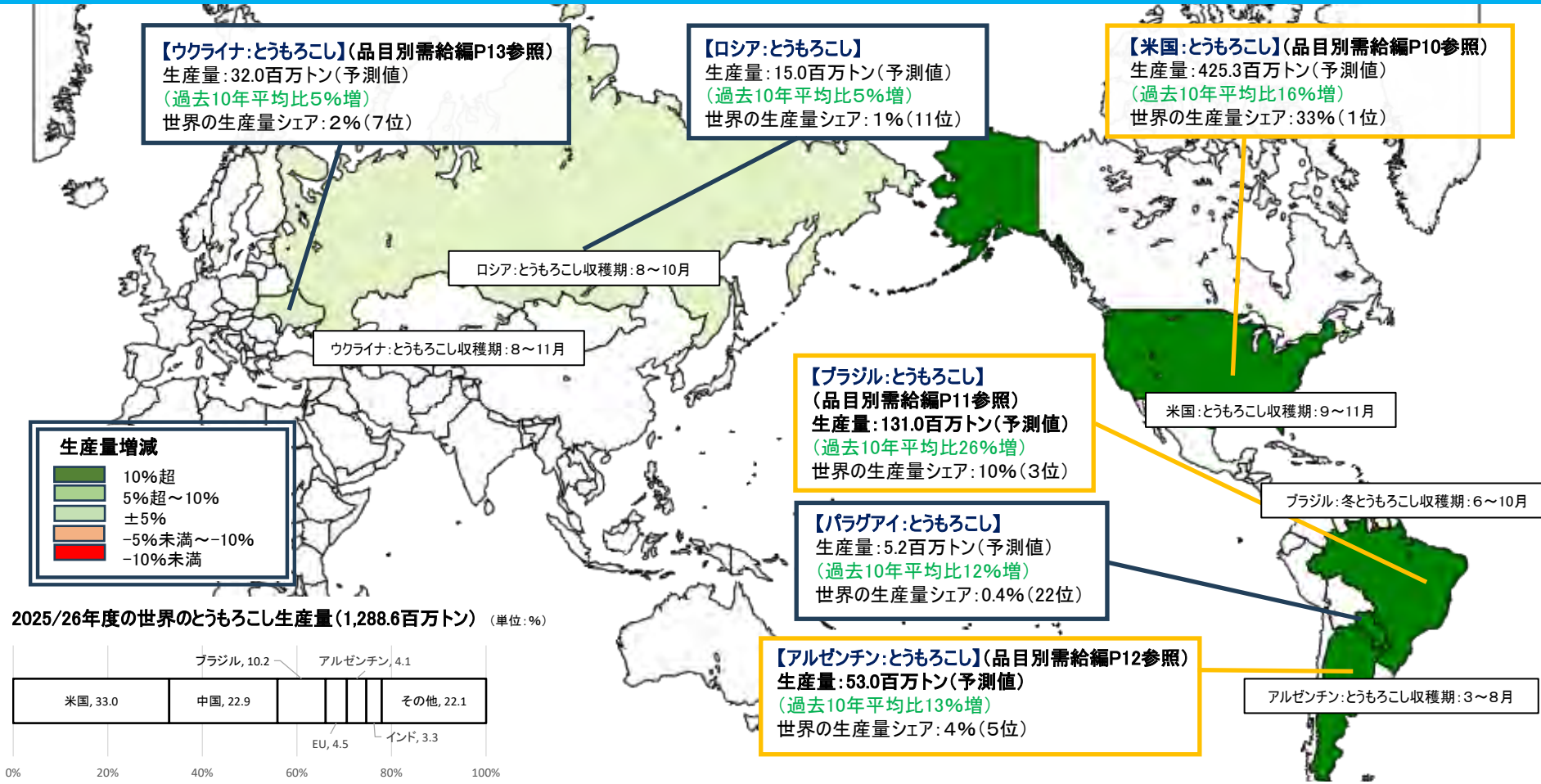


2024年の日本の小麦輸入品(5.2百万トン) (単位:%)

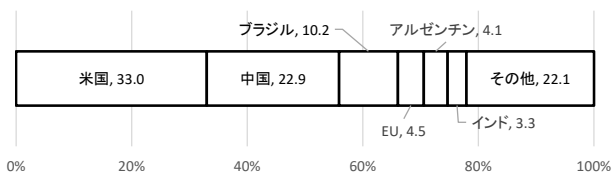


- 2023年度の日本の小麦輸入量は510万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(631万トン、うち食用は494万トン)の80.9%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は238kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の10.8%を占める。

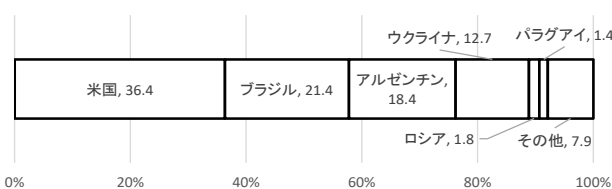
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(8月版)



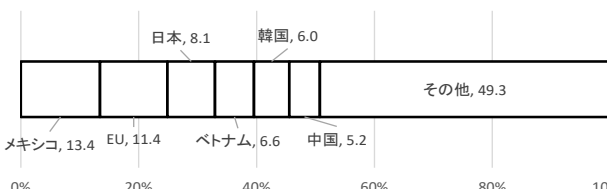
2025/26年度の世界のとうもろこし生産量(1,288.6百万トン) (単位:%)



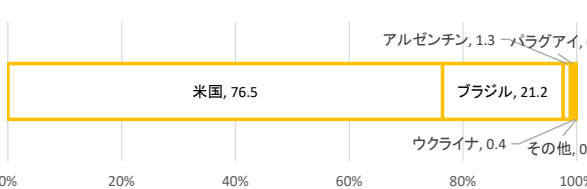
2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量(200.9百万トン) (単位:%)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量(192.2百万トン) (単位:%)

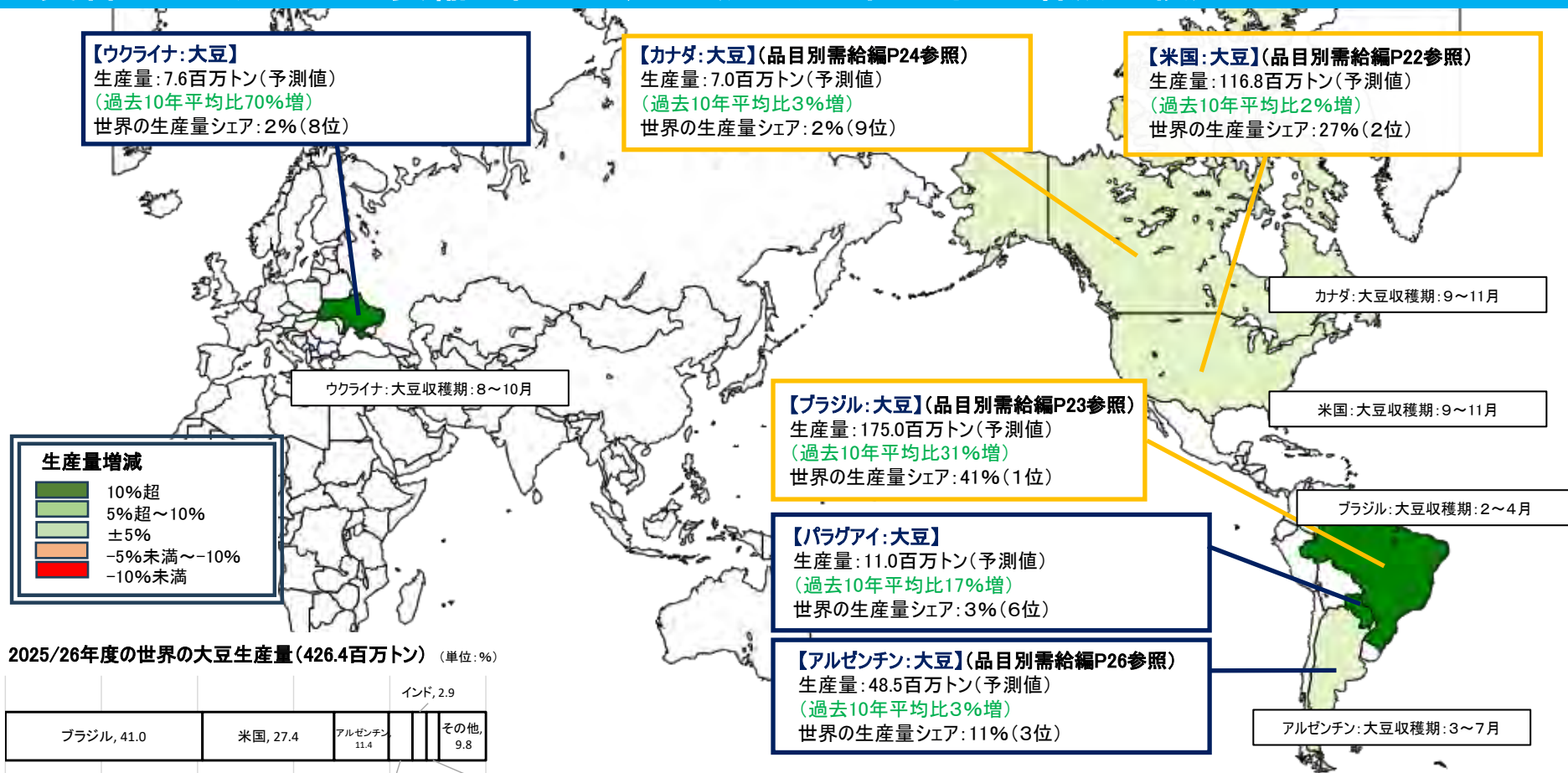


2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン) (単位:%)



○ 2023年度の日本のとうもろこし輸入量は1,499万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,486万トン、うち飼料用は1,159万トン)のほぼ全量を占める。

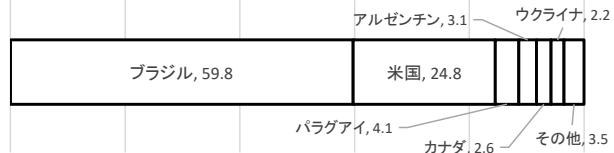
資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(8月版)



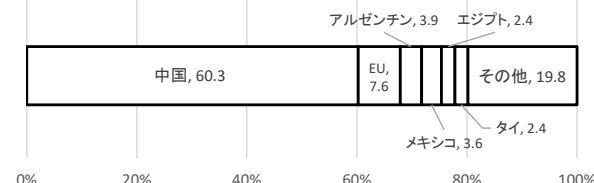
2025/26年度の世界の大豆生産量(426.4百万トン) (単位: %)



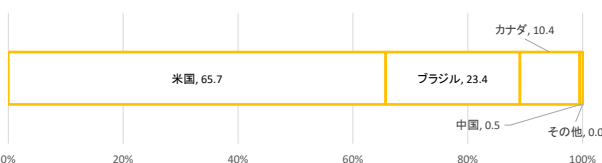
2025/26年度の世界の大豆輸出入(187.4百万トン) (単位: %)



2025/26年度の世界の大豆輸入量(185.9百万トン) (単位: %)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン) (単位: %)

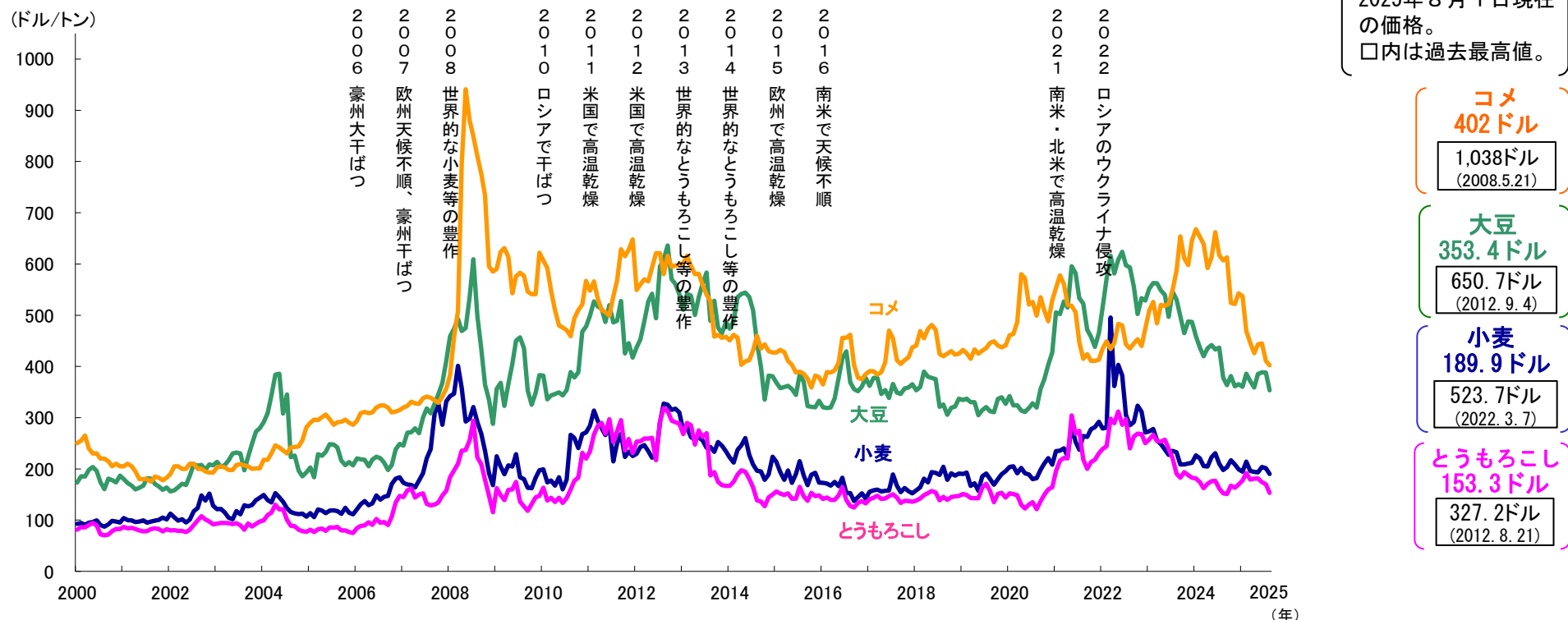


- 2023年度の日本の大豆輸入量は307万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(356万トン、うち大豆油などの加工用は255万トン、食用は87万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は55kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の2.5%を占める。

資料 1－4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



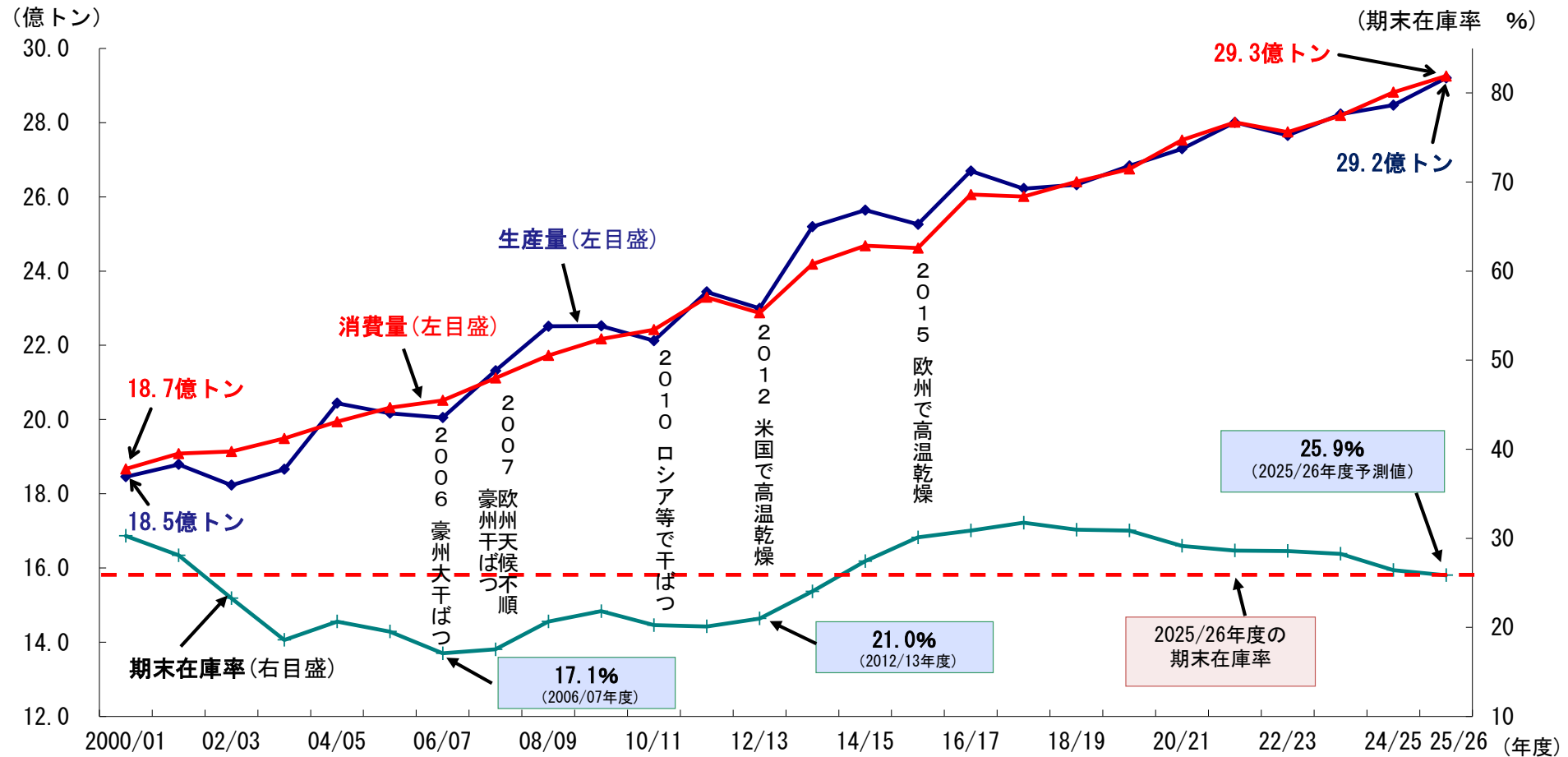
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、今回のコメは7月30日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2025/26年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、25.9%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

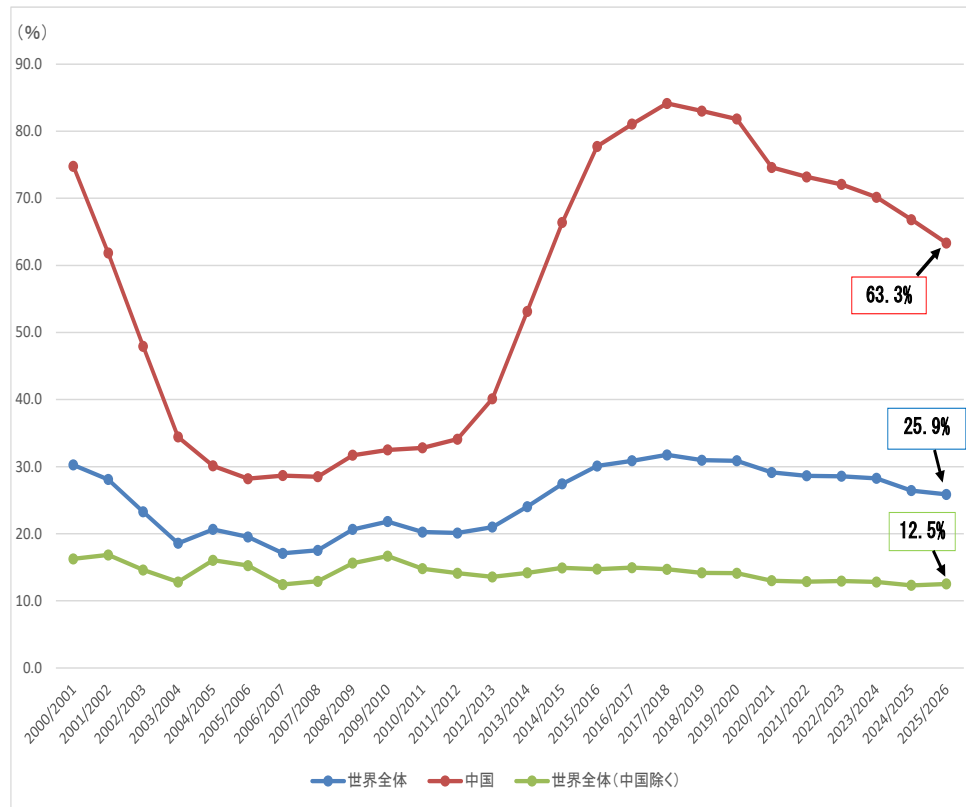


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(August 2025)、「PS&D」

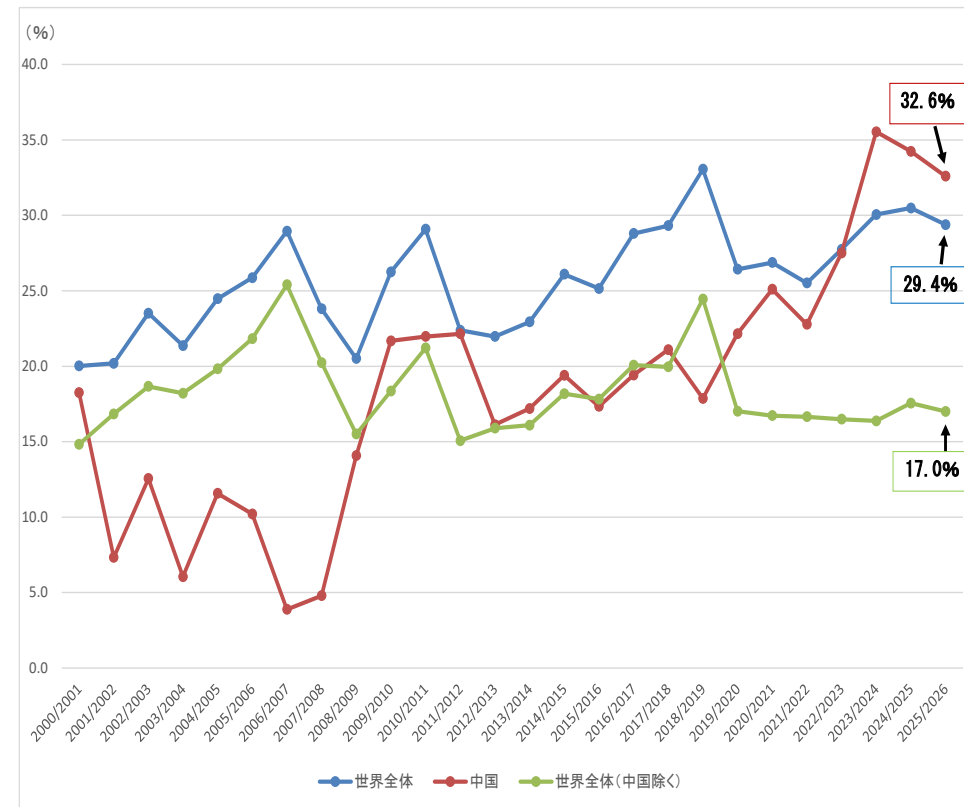
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

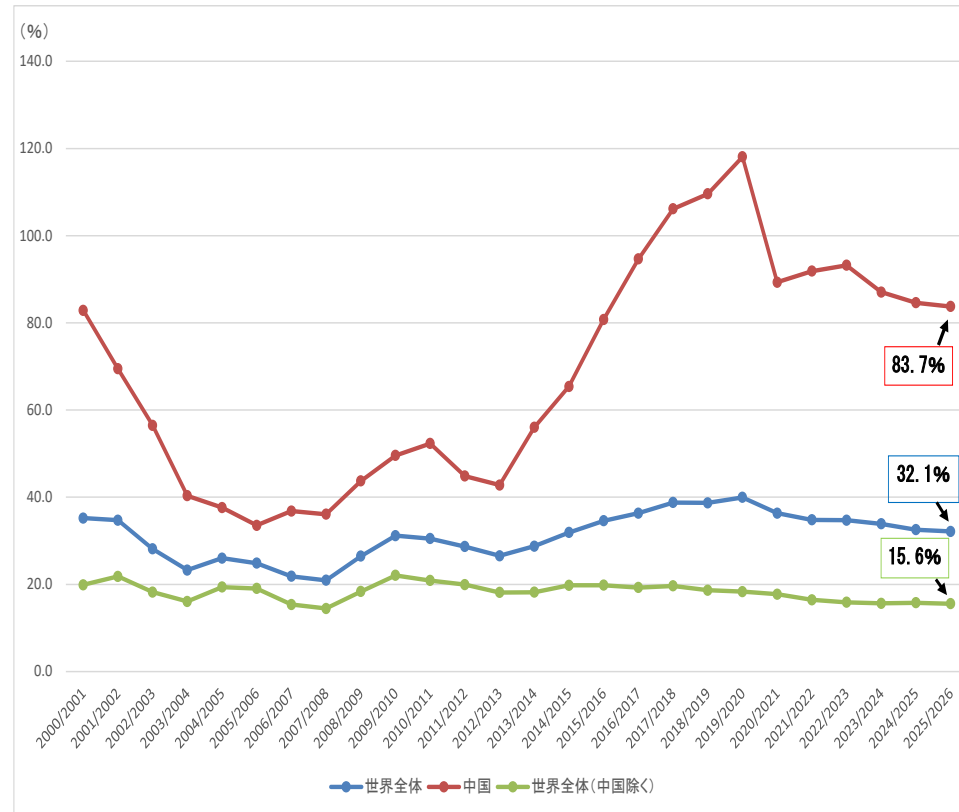
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

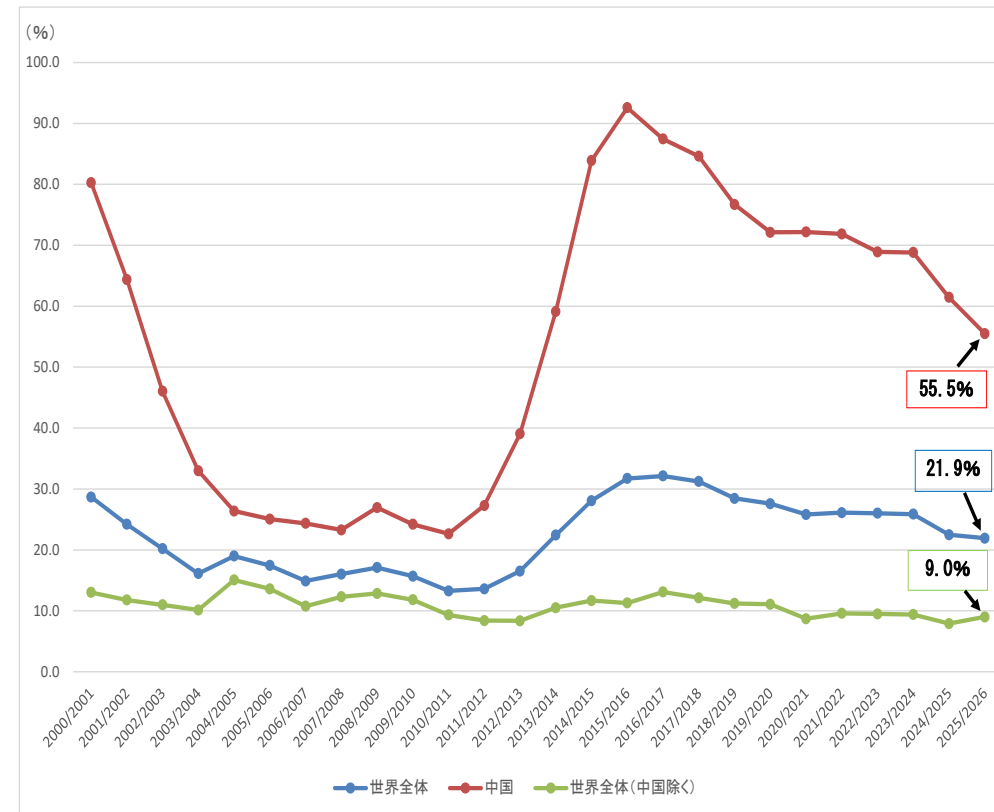
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

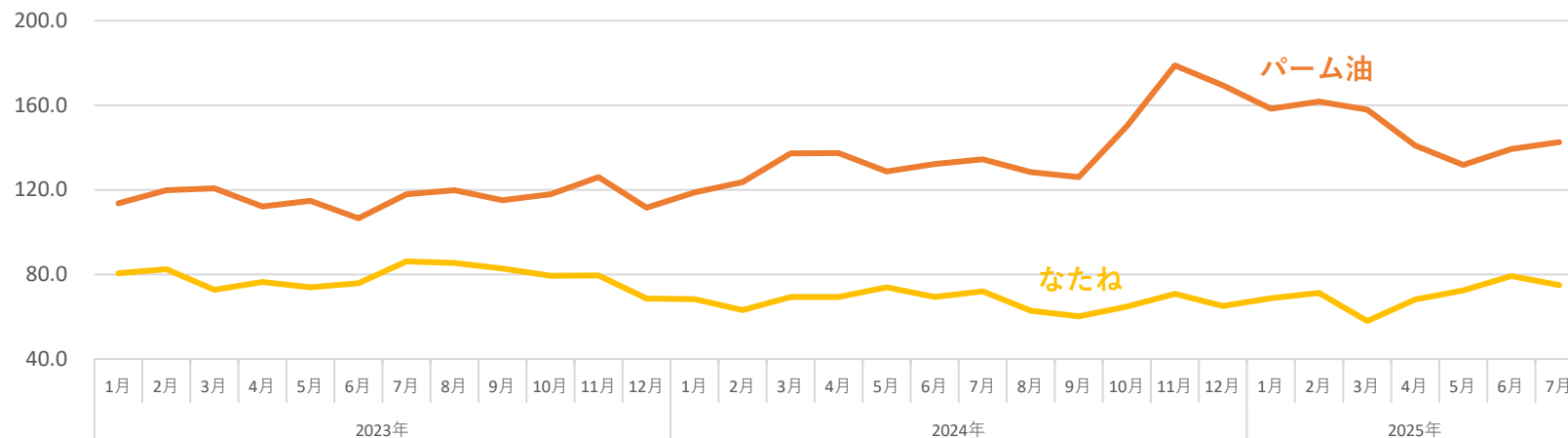
3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。直近では、インドからの堅調な祝祭需要等により上昇傾向にある。
- なたねについては、概ね安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降上昇しているが、直近では米国の関税政策をめぐる不確実性等は残るものの、下落傾向で推移している。

(千円/トン)



2025年8月21日現在
□内は2023年1月以降
の最高値。

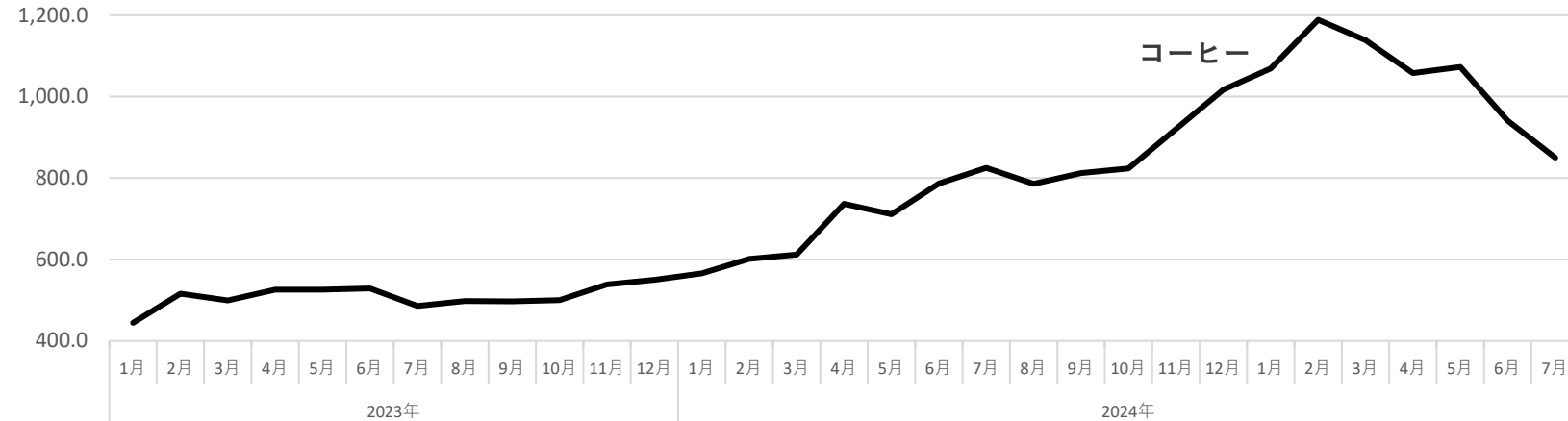
パーム油
142.5千円/トン

178.8千円/トン
(2024.11)

なたね
74.9千円/トン

86.2千円/トン
(2023.7)

(千円/トン)



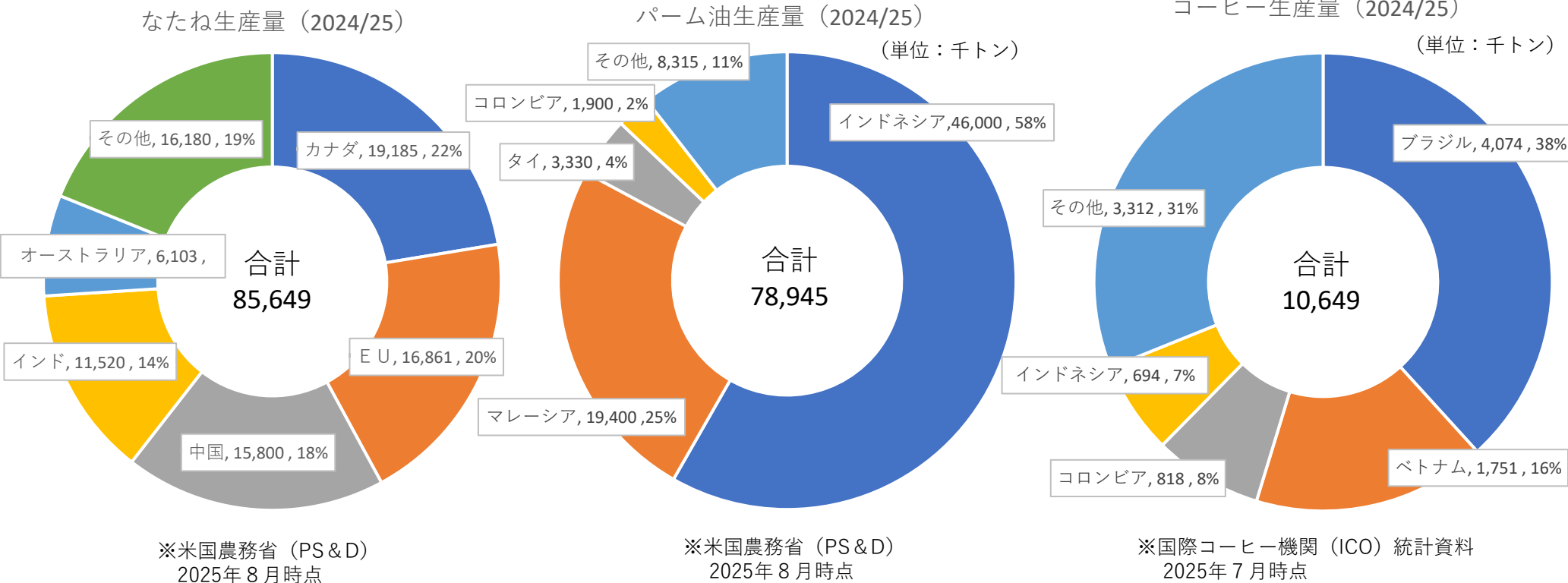
コーヒー
850.2千円/トン

1188.8千円/トン
(2025.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況（単位：千トン）



○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2024年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
オーストラリア	1,141	54.2%	マレーシア	561	85.6%	ブラジル	130	36.1%
カナダ	963	45.8%	インドネシア	94	14.4%	ベトナム	97	26.9%
その他	0	0.0%	その他	0	0.0%	コロンビア	36	10.0%
合計	2,104	100.0%	合計	655	100.0%	その他	97	26.9%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9					
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6					
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2					

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5					
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3					
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0					

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2					
前月比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4					
前年同月比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1					

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年7月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は118.3～153.0（前年同月比は-2.0%～11.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和7年2月～令和7年7月）

	R4	R5	R6	R7						
品目	年平均	年平均	年平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 （前年 同月比）
食パン	110.2	118.7	122.0	126.8	127.5	127.1	127.4	127.8	127.4	4.1%
即席めん	107.6	119.7	122.4	121.2	120.8	119.1	121.0	119.3	120.5	-2.0%
豆腐	105.3	114.6	118.2	119.3	120.1	120.4	120.6	121.8	121.8	3.2%
食用油 （キャノーラ油）	144.4	160.2	148.6	147.6	149.2	147.5	149.3	149.8	150.0	2.2%
みそ	101.2	108.1	113.6	114.8	115.3	116.1	118.0	117.7	118.3	4.3%
マヨネーズ	125.6	149.5	153.1	152.8	152.0	151.9	153.7	151.8	153.0	0.2%
チーズ	107.5	131.1	133.0	133.9	139.3	141.8	138.6	137.0	139.9	5.8%
バター	99.2	108.6	119.7	119.6	123.1	124.4	125.9	126.6	133.5	11.6%
生鮮食品を 除く食料	104.1	112.6	116.9	121.6	122.5	123.6	124.6	125.4	126.0	8.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和7年2月～令和7年8月）

	R4	R5	R6	R7								
品目	年平均	年平均	年平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	107.8	114.5	117.9	124.0	124.5	124.7	124.0	124.2	125.3	124.7	-0.5%	5.1%
即席めん	105.6	117.5	118.8	116.7	116.7	117.3	117.3	116.1	118.5	119.1	0.5%	-1.1%
豆腐	103.7	113.0	116.4	118.0	117.6	120.7	119.8	119.8	118.5	119.3	0.7%	2.9%
食用油 (キャノーラ油)	140.7	159.4	145.8	139.7	141.3	142.2	140.3	141.6	141.3	142.2	0.6%	-2.0%
みそ	100.1	105.9	109.5	110.0	110.4	110.2	110.4	111.7	113.6	113.1	-0.4%	3.0%
マヨネーズ	117.7	139.8	141.2	139.9	138.9	138.9	140.3	139.6	139.6	139.9	0.2%	-0.5%
チーズ	105.7	126.5	127.0	126.3	133.7	136.7	134.7	130.3	134.2	138.2	3.0%	6.9%
バター	99.1	108.0	119.3	119.4	124.8	127.1	127.1	127.3	136.2	138.5	1.7%	15.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年9月号（8月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）25年6月の牛肉生産量はわずかに減少、牛肉輸入量は大幅に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003868.html

（EU）域内の需給ひっ迫で牛枝肉価格は記録的な高値が続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003869.html

（豪州）牛肉輸出量は過去最高を更新、米国・中国向け需要がけん引

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003870.html

（NZ）24/25年度の牛肉生産量と輸出量、前年割れの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003871.html

◆豚肉

（カナダ）25年1～5月の豚肉輸出量、前年同期比5.5%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003872.html

（ブラジル）25年1～6月豚肉輸出量、中国向けは減少ながら全体では大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003873.html

◆牛乳・乳製品

（米国）25年5月の乳製品輸出、チーズやバターが前年同月比で増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003874.html

（EU）25年5月の生乳出荷量、前年同月をわずかに下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003875.html

（NZ）25/26年度の生乳生産量は好調なスタートを切る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003876.html

（中国）25年上期の生乳生産量、乳製品輸入量ともに前年同期比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003877.html

◆飼料穀物

（世界・トウモロコシ）25/26年度は生産量の下方修正から期末在庫はやや減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003880.html

（世界・大豆）25/26年度の大豆生産・消費量は増加、輸出減から期末在庫は上方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003881.html

（米国）作付面積の減少に伴い生産量は下方修正するも、期末在庫は大幅に増加

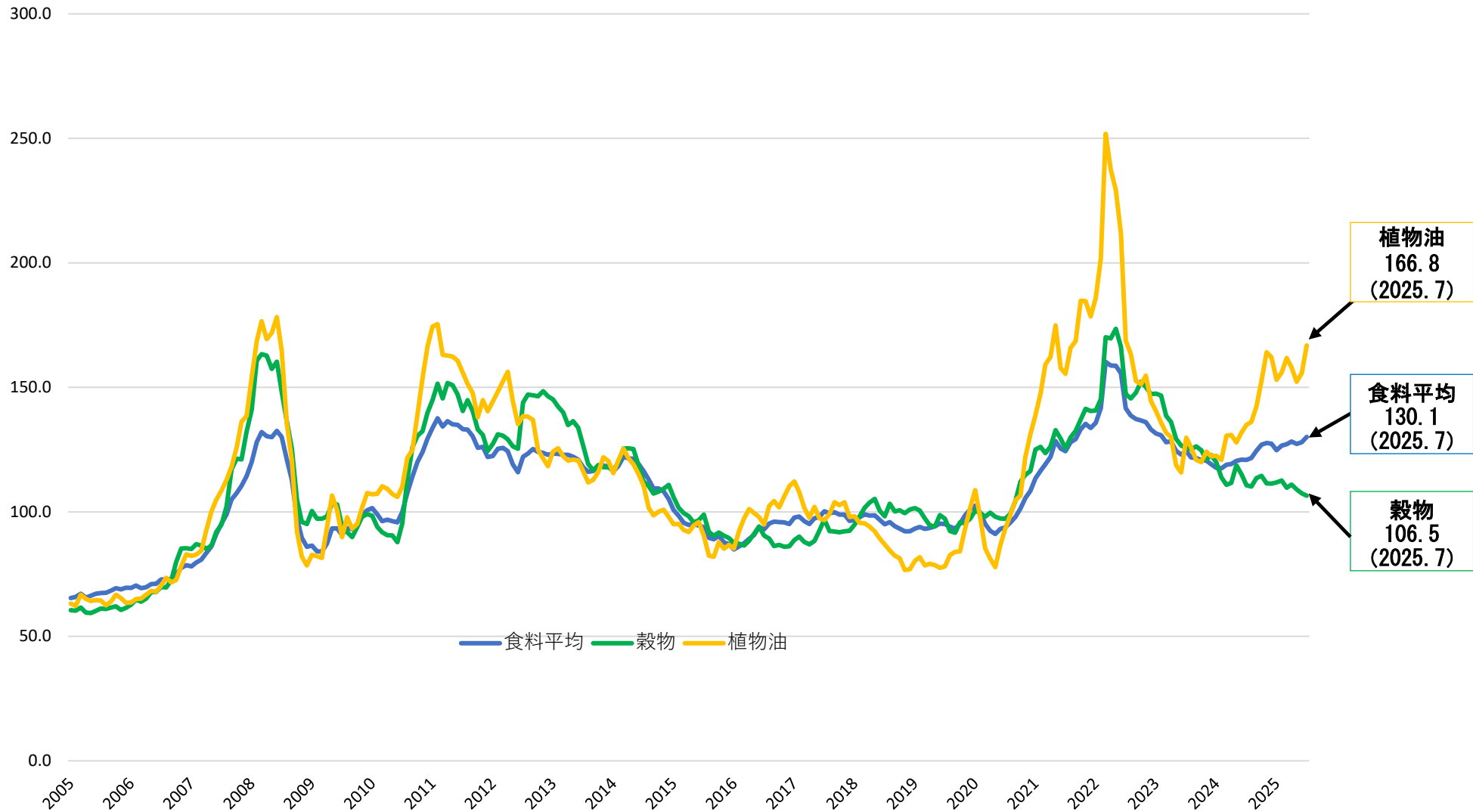
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003882.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003883.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.7)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ベトナムの食料事情：農林水産業及び食料安全保障政策

1 はじめに

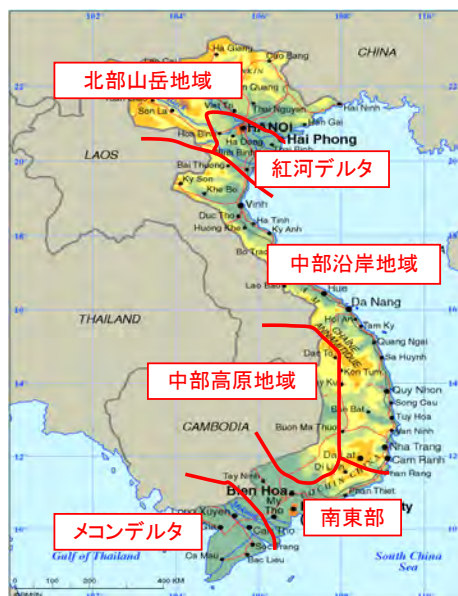
ベトナム統計総局によると、ベトナムの農林水産業の実質 GDP 成長率は、2023 年に 3.83%、2024 年に 3.27%とされています。ベトナム経済は、輸出好調を背景に、高い GDP 成長率を記録しており、近年農林水産物の輸出も大幅に増加しています。今回は農林水産物の輸出拡大が進むベトナムにおいて、特に政府が重視していると考えられる農林水産業及び食料安全保障に関連する政策を紹介します。

2 ベトナムの食料安全保障政策

(1) 2050 年を見据えた 2021 年から 2030 年までの持続可能な農業農村開発戦略¹

本戦略は、2022 年 1 月 28 日付けの首相決定 (No. 150/QĐ-TTg) により制定され、現在のベトナム農林水産行政の方向性を定める基本政策となっており、農林水産業の高度化・近代化による生産性・品質・持続可能性・競争力を向上させることにより、国家の食料安全保障を確保し、社会経済の安定に貢献することが目指されています。

特に、コメ生産の方向性については、品質と生産量の向上に重点を置き、土地と水資源を最も効率的な方法で最大限に活用することにより、食料安全保障を確保するとされています。そのために、メコンデルタや红河デルタなどのコメ生産に有利な地域においては、稲作専用の土地面積を厳格に管理し、大規模生産地域を形成するとされています。他方で、市場の変化に迅速に対応し、農家収入を増加させるため、コメと他の農作物との輪作や、養殖業を組み合わせることにも言及されています。ただし、この点については、必要に応じてコメ生産に戻れるように、水田を維持するとも記載されており、食料安全保障の確保に向けたコメ生産の重要性と、それに対する配慮がうかがえます。



ベトナム統計総局によると、ベトナムの 1 人当たり月額収入は、全国平均で約 540 万ドン（約 3 万円）、都市部では約 690 万ドン（約 3 万 8 千円）、農村部では約 450 万ドン（約 2 万 5 千円）、と都市部と農村部の収入格差はいまだに大きく、農村住民の所得向上は重要な目標の 1 つです。特に、北部山岳地域は貧困率が 20%を超える地域もあり、また国境地帯かつ少数民族が多く住む地域でもあることから、国家安全保障の観点からも、同地域の社会経済発展は政府の重要な取組とされています。

また、ベトナムは 2021 年の COP26 首脳級会合において、ファム・ミン・チン首相が 2050

¹ THE SUSTAINABLE AGRICULTURE AND RURAL DEVELOPMENT STRATEGIES FOR THE PERIOD 2021 - 2030 WITH A VISION TOWARD 2050

【今月のコラム】

年までに温室効果ガスの排出量実質ゼロ（カーボンニュートラル）を目指す」と表明しており、農林水産業のみならず、あらゆる産業が温室効果ガスの排出削減を掲げています。

本戦略では、これら目標達成のための主要施策として、農業DXや有機農業の活用、国内市場と海外市場の開発、バリューチェーンの構築、人材育成などに幅広く取り組むこととされており、農林水産業に関するGDPや輸出額の成長率（GDP成長率：年平均2.5～3.0%、輸出額成長率：年平均5.0～6.0%）、農村住民の所得の向上率（2020年比2.5～3.0倍）のほか、温室効果ガス排出量の削減率（2020年比10%削減）など、2030年までの具体的な数値目標が掲げられています。

（２）メコンデルタにおける2030年までのグリーン成長に関連した100万ヘクタールの低排出・高品質米の持続可能な開発計画²

本計画は、2023年11月27日付けの首相決定（No. 1490/QĐ-TTg）により制定され、現在ベトナム政府が最も力を入れているコメ政策の1つです。本計画は、ベトナムの食料安全保障を確保する上で重要な役割を果たしているメコンデルタにおいて、コメ農家の所得向上、国家の食料安全保障の確保、輸出促進を目指すとともに、持続可能な発展とグリーン成長に貢献し、政府のコミットメントである2050年までのカーボンニュートラル（ネットゼロ）を達成するために、温室効果ガス排出量が少なく高品質なコメ生産地域を構築することを目標としています。具体的な数値目標として、2030年までに、低排出・高品質米の栽培面積を100万ヘクタールとするほか、化学肥料・農薬の使用量の30%の削減、稲わらの回収・再利用率を100%、温室効果ガス排出量の10%以上の削減、コメ農家の利益率の50%以上の増加等が掲げられています。

この計画を実現するために、持続可能なコメ生産の技術パッケージの導入と農家等へのトレーニング、低排出米を栽培する地域にカーボンクレジットを付与するためのMRVシステム³の構築、低排出米のブランド構築と市場開発、インフラ整備への投資等を実施するとされています。

上述（１）からも分かるように、ベトナムにおいてコメ生産は国家の食料安全保障を確保するために重要な位置付けであり、その持続可能性を確保するために、農家の所得向上だけでなく、デジタル化や脱炭素化を推進する政策が策定されています。

（３）2030年までの国家の食料安全保障を確保するための決議⁴

本決議は、2021年3月25日付けの政府決議（No. 34/NQ-CP）により制定され、あらゆる状況においても、国内消費のための十分な食料を確保すること、質の高い食料へのアクセスと食の安全の確保等を目標としたものです。特に、食料供給の確保として、350万ヘクタールの水田を安定的に維持し、年間3,500万トン以上のコメを生産することが、

² The Scheme for “Sustainable development of one million hectares of low-emission, high-quality rice associated with green growth in the Mekong Delta through 2030”

³ カーボンクレジットが適切に生成され、信頼性を確保するために不可欠な「測定（Measurement）」「報告（Reporting）」「検証（Verification）」の一連プロセス。

⁴ Resolution on Ensuring National Food Security by 2030

【今月のコラム】

国家の食料安全保障の中核となり、消費・加工・貯蔵・輸出のニーズを満たすとされています。そのほか、野菜・豆類（120万～130万ヘクタール；2,300万～2,400万トン）、果樹（130万～140万ヘクタール；1,600万～1,700万トン）、各種肉類（600万～650万トン）、牛乳（260万トン）、鶏卵（230億個）、水産物（900万～1,000万トン）といった栽培・生産目標が掲げられています。

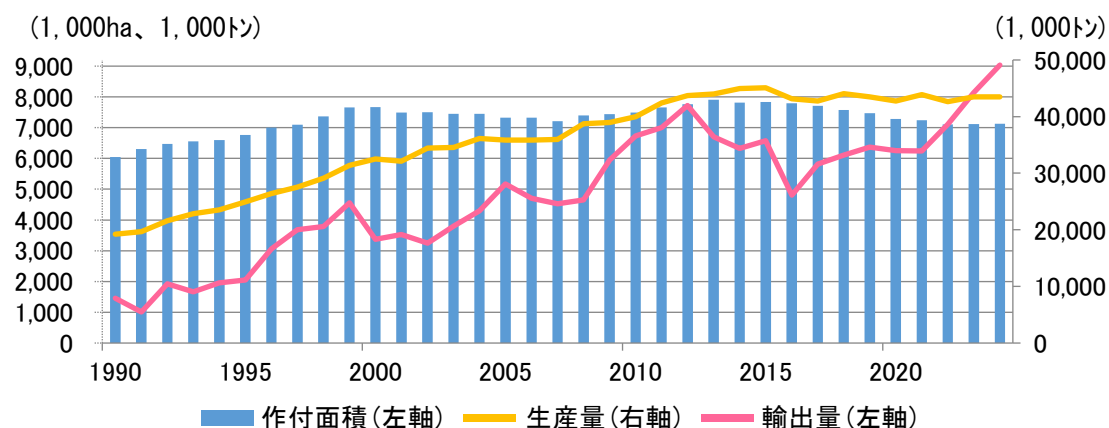
また、国民の食料アクセス能力の確保として、稲作農家の利益率向上、農村住民の所得向上のほか、インフラや流通システムの整備により国民の食料アクセス機会の増加が目標として掲げられています。さらに、栄養と食品安全の確保として、バランスの取れた食生活による栄養確保、コメの消費比率の低下と、肉・乳製品・卵・魚・野菜・果物の消費増加による国民生活の質を向上するとされています。このように、ベトナムでは、食料の供給量を確保するだけでなく、まだ不十分である食料へのアクセスや、栄養と食品安全を確保することにより、国家の食料安全保障を確保することが決議されています。

3 ベトナムにおけるコメの生産状況について

上述のとおり、ベトナムの食料安全保障政策において、コメは最も重要な作物です。近年のコメの作付面積・生産量・輸出量は図1のとおりです。「2030年までの国家の食料安全保障を確保するための決議」で目標としている作付面積350万ヘクタール及び年間生産量3,500万トン以上は現時点で達成していることが分かります（2024年の作付面積は713万ヘクタール、年間生産量は4,346万トン）。

このような、国内の生産状況を背景として、近年のベトナム政府は、農業の成長産業化や農家所得向上のため、コメをはじめとした農林水産物の輸出拡大に積極的に取り組んでいます。

図1：ベトナムのコメ作付面積・生産量・輸出量



資料：ベトナム統計総局

文責：田中祐輔（在ベトナム日本国大使館 一等書記官）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比  前月比 

・EU等で上方修正されたものの、中国、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

消費量 前年度比  前月比 

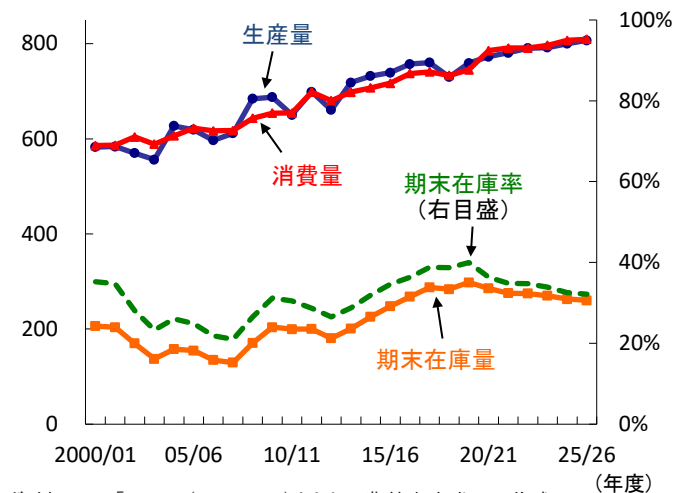
・EU等で上方修正されたものの、中国、フィリピン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ブラジル等で下方修正されたものの、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 

(百万トン)



資料:USDA「PS&D」(2025.8.12)をもとに農林水産省にて作成

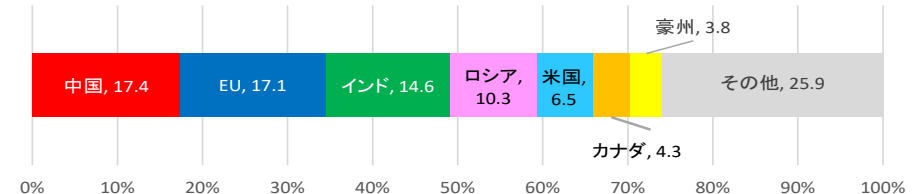
◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

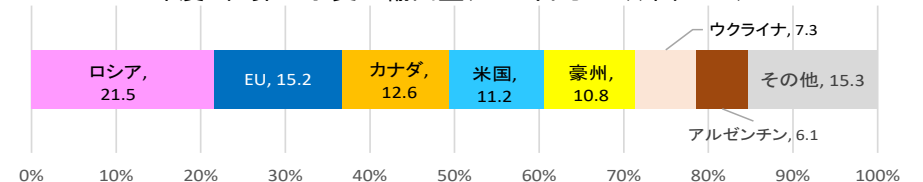
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	791.9	799.9	806.9	▲ 1.7	0.9
消 費 量	796.7	807.1	809.5	▲ 1.1	0.3
うち飼料用	158.6	156.4	154.9	▲ 1.3	▲ 1.0
輸 出 量	222.2	207.1	213.5	0.5	3.1
輸 入 量	223.0	199.1	209.5	0.6	5.2
期末在庫量	269.9	262.7	260.1	▲ 1.4	▲ 1.0
期末在庫率	33.9%	32.5%	32.1%	▲ 0.1	▲ 0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2025)

○ 2025/26年度 世界の小麦の生産量(806.9百万トン)(単位: %)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸出量(213.5百万トン)(単位: %)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸入量(209.5百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の輸出量は前年度から 5.9%増の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、収穫面積の引下げを受け前月予測から 0.04 百万トン下方修正され 52.5 百万トンとなる見込み。収穫面積が前年度より減少することから前年度と比べ 2.2%減となるものの、過去5年平均(48.4 百万トン)と比べ 8.4%増。

同「Crop Production」(2025.8.12)によれば、2025/26 年度の作付面積は、1,837 万ヘクタールと前年度と比べ 1.5%減となる見込み。2025/26 年度の実産量は、5,245 万トンで、種類別には冬小麦が 3,688 万トンと前年度と比べ 0.5%増、春小麦のうちデュラム小麦が 238 万トンと同 9.2%増となる一方、デュラム小麦を除く春小麦は 1,319 万トンと同 10.7%減となる見込み(表1)。

同「Crop Progress」(2025.8.11)によれば、8月 10 日現在、2025/26 年度の冬小麦の収穫進捗率は、90%と前年同期 92%、過去5年平均 91%を下回っているものの、ほぼ同水準。春小麦の作柄評価は、乾燥により「良～優良」の割合は 49%と、前年同期 72%を大きく下回っており、特にモンタナ州及びワシントン州の作柄が悪くなっている。春小麦の収穫進捗率は、16%と過去5年平均 22%を下回っているものの、前年同期では同水準となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、競争力のある価格及び好調な販売を受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され 23.8 百万トンとなる見込み。前年度と比べ 5.9%増、過去5年平均(22.2 百万トン)と比べても 7.2%増。

同「Wheat Outlook」(2025.6.16)によれば、2025/26 年度の輸出量は、2025/26 年度の実産量が過去5年平均比では増加していること、期末在庫量も3年連続で増加していること、ドル安により米国の小麦価格は他の輸出国と比べ競争力があることなどから、2020/21 年度(27.0 百万トン)以降最高となる見込み。一方で、他の輸出国の供給増により、米国の輸出量の劇的な増加は予想されておらず、主な競争相手国はロシア及び EU と見込まれている。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6月の輸出量は、171.9 万トンと前年度と比べ 13.5%増。輸出先国別には、フィリピン 26.9 万トン(15.6%)、メキシコ 24.9 万トン(14.5%)、ナイジェリア 15.4 万トン(9.0%)の順となっている(表2)。

2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け、前月予測から 0.6 百万トン下方修正され 23.6 百万トンとなるものの、前年度と比べ 2.1%増となる見込み。

小麦－米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年6月～26年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.1	53.7	52.5	▲ 0.04	▲ 2.2
消 費 量	30.2	31.0	31.4	▲ 0.1	1.2
うち飼料用	2.3	3.0	3.3	-	10.1
輸 出 量	19.2	22.5	23.8	0.7	5.9
輸 入 量	3.8	4.1	3.3	-	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.2	23.6	▲ 0.6	2.1
期末在庫率	38.4%	43.3%	42.8%	▲ 1.5	▲ 0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.01	15.57	14.80	▲ 0.03	▲ 4.9
単収(t/ha)	3.27	3.45	3.54	-	2.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 August 2025)

表1 米国の小麦生産量と作付面積

種類	品種	生産量			作付面積		
		2024/25年度 (万トン)	2025/26年度 (万トン)	対前年度 増減率(%)	2024/25年度 (万ヘクタール)	2025/26年度 (万ヘクタール)	対前年度 増減率(%)
冬小麦	ハード・レッド	2,097	2,093	-0.2	1,351	1,344	-0.5
	ソフト・レッド	932	924	-0.9			
	ハード・ホワイト	53	56	4.8			
	ソフト・ホワイト	589	615	4.4			
春小麦	ハード・レッド	1,369	1,223	-10.6	430	404	-6.0
	ハード・ホワイト	26	22	-13.1			
	ソフト・ホワイト	82	73	-10.5			
	デュラム	218	238	9.2			
計		5,365	5,245	-2.2	1,865	1,837	-1.5

資料:USDA「Crop Production」(2025.8.12)をもとに農林水産省で作成

表2 米国の小麦の輸出量と輸出先国
(輸出量:万トン、シェア:%)

2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)			2024/25年度 (2024年6月)			2025/26年度 (2025年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	24.6	16.2	フィリピン	26.9	15.6
フィリピン	245.0	11.2	韓国	20.2	13.3	メキシコ	24.9	14.5
韓国	238.7	10.9	フィリピン	18.8	12.4	ナイジェリア	15.4	9.0
日本	215.1	9.8	日本	15.4	10.2	日本	13.0	7.6
台湾	103.5	4.7	インドネシア	14.3	9.4	台湾	10.7	6.2
タイ	93.2	4.2	タイ	11.2	7.4	モルタニア	9.9	5.8
その他	897.2	40.9	その他	47.0	31.0	その他	71.1	41.3
計	2,193.5	100.0	計	151.6	100.0	計	171.9	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度並みの見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2025.8.20)によれば、2025/26 年度の実産量は、降雨により作柄が改善し単収が引き上げられたことを受け、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され 34.9 百万トンとなる見込み。史上3番目の生産量となった前年度(35.0 百万トン)と比べ 0.3%減となるものの、過去5年平均(32.1 百万トン)と比べ 8.5%増。種類別には、普通小麦は前月予測からの変更はなく 28.9 百万トンと、前年度(29.1 百万トン)と比べ 0.8%減、過去5年平均(27.0 百万トン)と比べ 6.7%増。デュラム小麦は単収の引上げを受け 0.4 百万トン上方修正され 6.0 百万トンと、前年度(5.9 百万トン)と比べ 2.1%増、過去5年平均(5.1 百万トン)と比べ 18.2%増となる見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2025」(2025.6.27)によれば、2025/26 年度の作付面積は、10.90 百万ヘクタールと前年度と比べ 1.0%増。種類別には、春小麦が 7.61 百万ヘクタールと前年度と比べ 0.7%減となる一方、デュラム小麦が 2.64 百万ヘクタールと同 2.6%増、冬小麦も 0.64 百万ヘクタールと同 18.2%増(表1)。

主要生産州政府によれば、サスカチュワン州では、8月 11 日現在の収穫進捗率は、冬小麦 16%(前年同期 29%)、春小麦1%(同2%)、デュラム小麦0%(同3%)となっており、降雨の影響で若干遅れている。アルバータ州では、8月5日現在の春小麦の作柄評価は、「良～優良」の割合が 65.5%と前年同期(50.7%)を上回る。8月 12 日現在の収穫進捗率は、冬小麦 51.8%(前年同期 57.4%)、春小麦 0.4%(同 0.3%)、デュラム小麦 1.9%(同 0.3%)。マニトバ州では、8月 18 日現在の収穫進捗率は、冬小麦 52%(前年同期 60%)、春小麦6%(同3%)。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 25.9 百万トンとなるものの、前年度と比べ 9.8%減となる見込み。種類別には、普通小麦が 21.1 百万トンと前年度と比べ 8.3%減、デュラム小麦が 4.8 百万トンと前年度と比べ 15.8%減となる見込み。2024/25 年度の輸出量は、好調な輸出を受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 28.7 百万トンと、前年度(25.3 百万トン)と比べ 13.4%増となる見込み。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2024/25 年度のうち 2024 年8月～2025 年6月の輸出量は、2,577.6 万トンと前年同期(2,301.7 万トン)と比べ 12.0%増。種類別には、普通小麦が 2,050.9 万トンと前年同期(1,976.0 万トン)と比べ 3.8%増。輸出先国別には、インドネシア 210.0 万トン(10.2%)、中国 178.5 万トン(8.7%)、日本 178.2 万トン(8.7%)の順。デュラム小麦は 526.7 万トンと前年同期(325.7 万トン)と比べ 61.7%増。輸出先国別には、アルジェリア 146.9 万トン(27.9%)、モロッコ 112.8 万トン(21.4%)、イタリア 80.8 万トン(15.3%)の順(表2)。

小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年8月～26年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	33.0	35.0	35.0 (34.9)	-	0.1
消 費 量	9.1	9.0	8.8 (8.3)	-	▲ 2.8
うち飼料用	4.0	3.8	3.5 (3.8)	-	▲ 7.9
輸 出 量	25.4	27.5	27.0 (25.9)	-	▲ 1.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	4.6	3.6	3.5 (4.4)	-	▲ 4.1
期末在庫率	13.3%	10.0%	9.8% (12.7%)	-	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	10.65	10.70 (10.75)	-	0.5
単収(t/ha)	3.08	3.28	3.27 (3.24)	-	▲ 0.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(20 August 2025)

表1 カナダの小麦作付面積の推移

	2023/24年度	2024/25年度	2025/26年度	対前年度 増減率(%)
春小麦	789.0	766.6	761.2	-0.7
デュラム小麦	244.2	257.6	264.3	2.6
冬小麦	58.6	54.3	64.1	18.2
小麦計	1,091.8	1,078.4	1,089.6	1.0

資料:カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2025」(2025.6.27)をもとに
農林水産省で作成

表2 カナダの小麦の輸出量と輸出先国

○普通小麦 (輸出量:万トン、シェア:%)					
2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)			2023/24年度 (2023年8月～2024年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	310.3	14.7	中国	292.9	14.8
インドネシア	251.9	11.9	インドネシア	229.2	11.6
日本	173.9	8.2	バングラデシュ	172.7	8.7
バングラデシュ	172.7	8.2	日本	158.6	8.0
ペルー	137.3	6.5	ペルー	122.4	6.2
その他	1,069.2	50.5	その他	1,000.2	50.6
計	2,115.3	100.0	計	1,976.0	100.0

○デュラム小麦 (輸出量:万トン、シェア:%)					
2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)			2023/24年度 (2023年8月～2024年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
アルジェリア	89.3	26.0	アルジェリア	89.3	27.4
モロッコ	81.7	23.8	モロッコ	77.2	23.7
米国	46.2	13.5	米国	42.6	13.1
イタリア	44.7	13.0	イタリア	39.8	12.2
日本	21.2	6.2	日本	20.4	6.3
その他	60.4	17.6	その他	56.4	17.3
計	343.5	100.0	計	325.7	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2025/26 年度の WA 州の生産量は上方修正され 11.5 百万トンの見込み(GIWA)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2025.6.3)によれば、2025/26 年度の生産量は、30.6 百万トンとなる見込み。前年度から収穫面積及び単収が減少することから前年度(34.1 百万トン)と比べ 10.4%減、過去5年平均(33.8 百万トン)と比べ 9.5%減。州別には、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)が 11.0 百万トン(前年度比 13.0%減)、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)が 9.7 百万トン(同 24.8%減)、クイーンズランド州(QLD 州)が 1.9 百万トン(同 17.0%減)と平年並みの天候になるとの予想から、豊作だった前年度に比べ減少する一方、サウスオーストラリア州(SA 州)が 4.2 百万トン(同 50.2%増)、ビクトリア州(VIC 州)が 3.8 百万トン(同 8.6%増)と乾燥が続いているものの前年度に比べ生産量が増加する見込み。

他方、USDA によれば、2025/26 年度の前月予測からの変更はなく 31.0 百万トンとなる見込み。前年度から収穫面積及び単収が減少することから前年度と比べ 9.1%減、過去5年平均(33.8 百万トン)と比べ 8.2%減。

同「Grain and Feed Update」(2025.7.25)によれば、南部の冬作物生産地域では、降雨量が平年を下回り、土壌水分量も少なく4月は厳しいシーズンのスタートとなった。しかし、7月初め2週間の降雨で土壌水分量は改善した(図)。今後数か月も良好な降雨があると予想されており、2025/26 年度の小麦の生産量は平年を上回る見込み。

西豪州穀物産業協会(GIWA)「Crop Report」(2025.8.15)によれば、WA 州の小麦生産量は、作付面積は前年度から減少するものの、7月は降雨に恵まれたこと等により、前月予測から 2.1 百万トン上方修正され 11.5 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、23.0 百万トンと期首在庫量が増加することから前年度(22.0 百万トン)と比べ 4.5%増加するものの、過去5年平均(24.9 百万トン)と比べ 7.8%減となる見込み。また、USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 23.0 百万トンと、生産量が減少することから、前年度と比べ 8.0%減、過去5年平均(25.6 百万トン)と比べ 10.1%減となる見込み。

ABARES によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年6月の輸出量は、1,770.0 万トンと前年同期(1,612.4 万トン)と比べ 9.8%増。輸出先国別には、インドネシア 321.3 万トン(18.2%)、フィリピン 239.3 万トン(13.5%)、タイ 148.7 万トン(8.4%)の順で、中国は 92.5 万トン(5.2%)と大きくシェアを減少させている(表)。

2025/26 年度の期末在庫量は、4.9 百万トンと生産量の減少及び輸出量の増加等を受け前年度(6.1 百万トン)と比べ 19.6%減となる見込み。

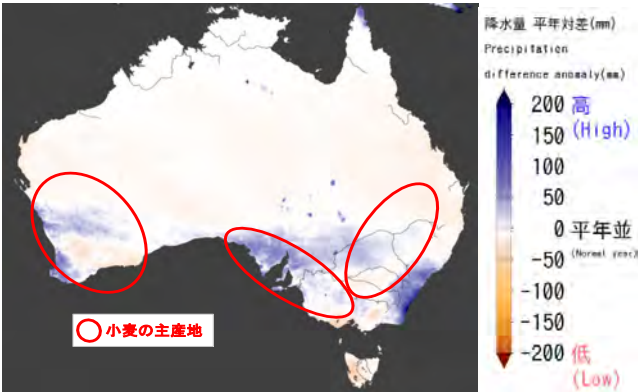
小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月～26年9月)		
			予測値、()はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.0	34.1	31.0 (30.6)	-	▲ 9.1
消 費 量	7.8	8.0	8.1 (8.8)	-	1.3
うち飼料用	4.3	4.5	4.6 ...	-	2.2
輸 出 量	19.8	25.0	23.0 (23.0)	-	▲ 8.0
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 ...	0.03	-
期末在庫量	2.9	4.3	4.4 (4.9)	0.03	3.1
期末在庫率	10.5%	12.9%	14.1% (15.5%)	0.1	1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.37	13.06	12.50 (12.63)	-	▲ 4.3
単収(t/ha)	2.10	2.61	2.48 (2.42)	-	▲ 5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
ABARES「Australian Crop Report」(3 June 2025)

図 豪州の降水量平年対差(2025 年7月1～15 日)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 豪州の小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	375.6	19.0	中国	373.6	23.2	インドネシア	321.3	18.2
インドネシア	323.5	16.3	インドネシア	256.2	15.9	フィリピン	239.3	13.5
フィリピン	233.7	11.8	フィリピン	173.4	10.8	タイ	148.7	8.4
イエメン	152.2	7.7	イエメン	120.0	7.4	ベトナム	111.3	6.3
韓国	123.5	6.2	ベトナム	98.5	6.1	イエメン	106.2	6.0
日本	120.6	6.1	韓国	96.6	6.0	韓国	102.3	5.8
その他	651.8	32.9	その他	494.1	30.6	その他	740.9	41.9
計	1,980.8	100.0	計	1,612.4	100.0	計	1,770.0	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 14.0%増の見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2025.7.24)によれば、2025/26 年度の実産量は、収穫面積の引下げを受け前月予測から 0.6 百万トン下方修正され 135.6 百万トンとなるものの、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度(118.9 百万トン)から生産量が回復することから、前年度と比べ 14.0%増、過去5年平均(129.5 百万トン)と比べ 4.7%増となる見込み(図)。種類別には、普通小麦がスペイン等で前月から下方修正され 127.3 百万トンとなるものの、フランス、ドイツ等で生産量が回復することから前年度と比べ 14.0%増、過去5年平均と比べ 4.3%増となる見込み。デュラム小麦は、ギリシャ等で前月から上方修正され 8.3 百万トンと、前年度と比べ 15.2%増、過去5年平均と比べ 10.7%増となる見込み。他方、USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 138.3 百万トンと、前年度と比べ 13.2%増となる見込み。EC「JRC MARS Bulletin – Crop monitoring in Europe」(2025.7.21)によれば、冬小麦を含む秋播き作物は、ルーマニア、ブルガリア、フランス、スペイン、アイルランド等では十分な水が供給され平年を上回る生産量が見込まれる。一方、イタリア及びトルコでは、高温と乾燥により平年を下回る生産量となる可能性がある。また、春小麦を含む春播き作物は、南欧州及び東欧州で高温と乾燥が作物の生長に悪影響を及ぼしている。

【貿易情報・その他】EC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 30.7 百万トンとなる見込み。減産の前年度から生産量が回復することから前年度(25.0 百万トン)と比べ 22.7%増。

2024/25 年度のうち 2024 年7月～2025 年5月の輸出量は、2,421.3 万トンと減産により前年同期(3,351.8 万トン)と比べ 27.8%減。種類別には、普通小麦が 2,349.9 万トンと前年度と比べ 28.1%減。デュラム小麦も 71.4 万トンと同 12.9%減(表)。USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2025.7.11)によれば、EU では 2024/25 年度の実産量が大きく減少し、ロシア及びウクライナに北アフリカの輸出シェアを奪われ同地域のシェアは 25%強まで低下した。

EC によれば、2025/26 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく 5.4 百万トンとなる見込み。ウクライナからの輸入が減少すると見込まれることから前年度(10.3 百万トン)と比べ 48.1%減。

2024/25 年度のうち 2024 年7月～2025 年5月の輸入量は、945.8 万トンとウクライナやロシアからの輸入が減少したこと等から前年同期(1,135.8 万トン)と比べ 16.7%減。種類別には、普通小麦が 752.0 万トンと前年度と比べ 16.3%減。デュラム小麦も 193.8 万トンと、同 18.3%減(表)。

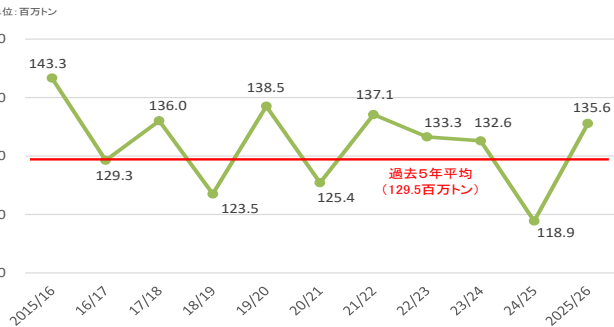
2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引下げ等を受け前月予測から 0.9 百万トン下方修正され 8.4 百万トンと、前年度(10.2 百万トン)と比べ 17.7%減となる見込み。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)			
			予測値、() はEC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	135.4	122.1	138.3 (135.6)	1.0	13.2	
消 費 量	110.5	109.3	112.0 (112.0)	1.0	2.5	
うち飼料用	46.5	45.0	47.5 (46.7)	1.0	5.6	
輸 出 量	38.0	27.0	32.5 (30.7)	-	20.4	
輸 入 量	12.7	10.7	6.5 (5.4)	-	▲ 39.3	
期末在庫量	15.8	12.4	12.6 (8.4)	-	2.0	
期末在庫率	10.6%	9.1%	8.7% (5.9%)	▲ 0.1	▲ 0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.32	22.70	23.85 (23.26)	▲ 0.15	5.1	
単収(t/ha)	5.57	5.38	5.80 (5.83)	0.08	7.8	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
EC「EU Cereals Balance Sheets」(24 July 2025)

図 EUの小麦生産量の推移



資料:EC「EU cereals production, area and yield」(2025.7.24)をもとに農林水産省で作成

表 EUの小麦の輸出量及び輸入量

〇輸出量						〇輸入量					
2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年5月)			2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年5月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
モロッコ	489.1	13.5	モロッコ	325.8	13.5	ウクライナ	647.1	53.9	ウクライナ	443.7	46.9
アルジェリア	396.7	11.0	アルジェリア	302.5	12.5	カナダ	138.5	11.5	カナダ	224.7	23.8
ナイジェリア	348.9	9.6	ナイジェリア	266.5	11.0	ロシア	82.1	6.8	モルドバ	60.1	6.4
中国	237.2	6.5	英国	168.9	7.0	トルコ	76.7	6.4	米国	55.6	5.9
エジプト	178.2	4.9	エジプト	159.0	6.6	モルドバ	72.9	6.1	セルビア	52.1	5.5
サウジアラビア	153.8	4.2	サウジアラビア	97.5	4.0	カザフスタン	56.8	4.7	英国	37.1	3.9
その他	1,817.3	50.2	その他	1,101.2	45.5	その他	126.4	10.5	その他	72.5	7.7
合計	3,621.2	100.0	合計	2,421.3	100.0	合計	1,200.5	100.0	合計	945.8	100.0

資料:EC「EU trade for cereals」(2025.7.17)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.3%増の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく 83.5 百万トンとなる見込み。霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することから、前年度と比べ 2.3%増となるものの、過去5年平均(85.1 百万トン)と比べ 1.9%減(図)。種類別には、冬小麦は 60.5 百万トンと、前年度(55.8 百万トン)と比べ 8.4%増となる一方、春小麦は 23.0 百万トンと、前年度(25.8 百万トン)と比べ 10.9%減となる見込み。

同「World Agricultural Production」(2025.7.11)によれば、冬小麦の主要生産地である欧州部では、2024 年秋、2025 年早春に乾燥に見舞われたが、5月の降雨により冬小麦の作柄は回復し生産量見通しが向上した。一方、春小麦は、当初の作付進捗は早かったものの、主要生産地の広範囲にわたる降雨のため、進捗は大幅に減速した。

現地情報会社によれば、2025/26 年度小麦の作付面積は、2,690 万ヘクタールと前年度(2,851 万ヘクタール)と比べ 5.6%減となっている。ロシアでは収益性の高い油糧作物の作付けが拡大しており、小麦等の穀物の作付けは減少傾向となっている。

収穫進捗は、8月8日現在、収穫面積が前年同期と比べ 143 万ヘクタール減の 1,508 万ヘクタールとなっており、主要な産地のうち、欧州部の中央連邦管区及び沿ヴォルガ連邦管区において降雨の影響により収穫が遅れている。また、収穫量は前年同期と比べ 299 万トン減の 5,485 万トンとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 46.0 百万トンとなる見込み。生産量が増加することから前年度と比べ 7.0%増、過去5年平均(44.1 百万トン)と比べ 4.3%増と史上3番目の輸出量となる見込み(図)。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月の輸出量は、172.1 万トンと前年同期(342.5 万トン)と比べ 49.8%減となっており、収穫の遅れに伴う供給不足が主な要因。輸出先国別には、エジプト 35.9 万トン(20.9%)、トルコ 18.8 万トン(10.9%)、サウジアラビア 13.8 万トン(8.0%)の順(表)。なお、7月末にはルーブル安となる傾向がみられ、今後の輸出に追い風になるとみられる。

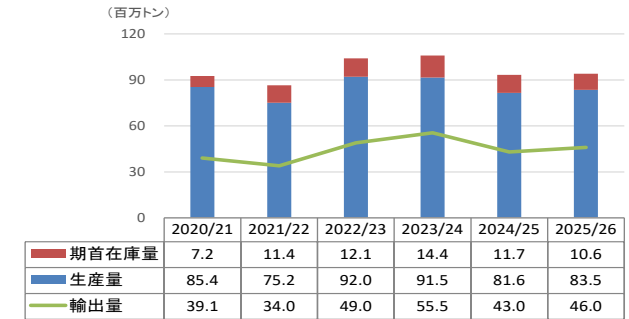
USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく 9.4 百万トンと、前年度と比べ 11.3%減となる見込み。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	91.5	81.6	83.5 (81.7)	-	2.3
消 費 量	39.0	40.0	39.0 (39.1)	-	▲ 2.5
うち飼料用	16.0	17.0	16.0 (16.1)	-	▲ 5.9
輸 出 量	55.5	43.0	46.0 (43.0)	-	7.0
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.5)	-	-
期末在庫量	11.7	10.6	9.4 (9.4)	-	▲ 11.3
期末在庫率	12.4%	12.8%	11.0% (11.4%)	-	▲ 1.7

(参考)
収穫面積(百万ha) 28.83 27.80 26.70 (26.36) - ▲ 4.0
単収(t/ha) 3.17 2.94 3.13 (3.10) - 6.5
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 ロシアの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの小麦の輸出量と輸出先国
(輸出量: 万トン、シェア: %)

2024/25年度 (2024年7月)			2025/26年度 (2025年7月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	54.2	15.8	エジプト	35.9	20.9
サウジアラビア	31.0	9.1	トルコ	18.8	10.9
モロッコ	23.3	6.8	サウジアラビア	13.8	8.0
カザフスタン	18.3	5.3	スーダン	13.5	7.8
リビア	14.2	4.1	ケニア	8.8	5.1
その他	201.5	58.8	その他	81.3	47.2
合計	342.5	100.0	合計	172.1	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 6.0%減の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく22.0百万トンとなる見込み。前年度から単収が減少することから前年度と比べ6.0%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)と比べ21.2%減。

同「World Agricultural Production」(2025.8.12)によれば、2025/26年度の単収は、4.00トン/ヘクタールと前月比9%減、前年度比11%減となる一方、収穫面積は、5.5百万ヘクタールと前月比10%増、前年度比6%増となったことから、生産量は前月予測から変更はなく22.0百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、8月7日現在の小麦の収穫進捗率は74.4%と、高温乾燥により収穫が早まった前年同期(97.4%)と比べ遅れている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく15.5百万トンとなる見込み。生産量の減少等から前年度と比べ1.6%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)と比べ14.4%減。一方、2024/25年度の輸出量は、前月予測から0.15百万トン下方修正され15.8百万トンと、前年度と比べ15.2%減。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止する「自主貿易措置(ATMs)」を実施してきた。当該措置は本年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、小麦及びメスリンに対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直し、今後、正式採択を経て発効する見通し。報道によれば、ATMsの失効によって、ウクライナ産小麦のEU輸出は減少すると予想されており、ウクライナは北アフリカやアジアへの輸出に一層注力するとみられる。

ウクライナ税関庁によれば、2025/26年度のうち2025年7月の輸出量は、73.3万トンと、前年同期(154.5万トン)と比べ52.6%減となっている。輸出先国別には、エジプト32.0万トン(43.7%)、スペイン15.3万トン(20.8%)、インドネシア11.4万トン(15.6%)の順(表)。現地情報会社によれば、7月の輸出量は2022年に次いで少なく、収穫の遅れによる供給不足が要因とみられる。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げを受け前月予測から0.7百万トン下方修正され0.9百万トンと、前年度と比べ同水準となる見込み。

小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	23.0	23.4	22.0 (25.1)	-	▲ 6.0	
消 費 量	6.0	8.2	6.6 (8.9)	-	▲ 19.5	
うち飼料用	1.5	3.6	2.0 (1.4)	-	▲ 44.4	
輸 出 量	18.6	15.8	15.5 (16.0)	-	▲ 1.6	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9	
期末在庫量	1.4	0.9	0.9 (1.5)	▲ 0.7	-	
期末在庫率	5.7%	3.9%	4.2% (6.0%)	▲ 3.0	0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.01	5.20	5.50 (6.10)	0.50	5.8	
単収(t/ha)	4.59	4.50	4.00 (4.12)	▲ 0.40	▲ 11.1	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移

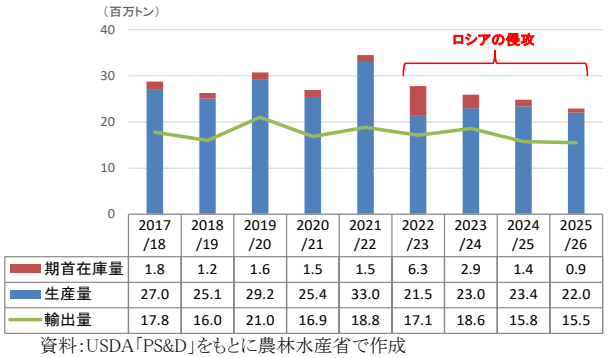


表 ウクライナの小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月)			2025/26年度 (2025年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
スペイン	326.1	20.9	スペイン	28.3	18.3	エジプト	32.0	43.7
エジプト	211.1	13.5	エジプト	21.5	13.9	スペイン	15.3	20.8
アルジェリア	195.1	12.5	アルジェリア	18.2	11.8	インドネシア	11.4	15.6
インドネシア	158.8	10.2	インドネシア	17.8	11.5	ベトナム	5.5	7.5
ベトナム	104.7	6.7	ベトナム	13.8	9.0	チェンジア	2.7	3.7
その他	566.5	36.3	その他	54.9	35.5	その他	6.4	8.7
合計	1,562.2	100.0	合計	154.5	100.0	合計	73.3	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26年度の生産量は前年度と同水準の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引下げを受け前月予測から 2.0 百万トン下方修正され 140.0 百万トンとなる見込み。前年度から単収が減少することから前年度と比べ 0.1%減となるものの、過去5年平均(137.1 百万トン)と比べ 2.1%増となり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み(図)。

中国国家统计局(2025.7.10)によれば、2025/26 年度の夏季産小麦の作付面積は、23.07 百万ヘクタールと前年度から 1.7 万ヘクタール減少し 0.1%減となる見込み。単収は 5.99トン/ヘクタールと、前年度から僅かに減少するものの、ほぼ横ばい。生産量は 138.2 百万トンと、前年度から 17 万トン減少し 0.1%減となる見込み。

中国農業農村部(2025.6.18)によれば、6月 18 日現在の冬小麦の収穫進捗率は、96%となっており、主要生産地の収穫は終了している。また、中国中央气象台「作物生育期監視」(2025.8.3～8.9)によれば、春小麦の生育状況は主要生産地の大部分で開花期～収穫期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、飼料用消費量の引下げを受け前月予測から 2.0 百万トン下方修正され 148.0 百万トンとなる見込み。前年度と比べ 1.3%減、過去5年平均(150.9 百万トン)と比べても 1.9%減。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく 6.0 百万トンとなる見込み。期首在庫量の減少等から前年度と比べ 43.9%増。2024/25 年度の輸入量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 4.2 百万トンとなるものの、供給量の増加等を受け前年度と比べ 69.4%減となる見込み。

中国国务院関税税則委員会は、米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。これにより小麦は計 25%の追加関税を課すこととなった。その後、ストックホルムで実施された米中経済貿易協定の共同声明を受け、8月 12 日、同第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を引き続き 90 日間停止すると発表した。

中国海関統計によれば、2024/25 年度の輸入量は、386.1 万トンと、増産等を受け前年度(1,336.5 万トン)と比べ 71.1%減となっている。輸入先国別には、カナダ 185.9 万トン(48.1%)、豪州 87.1 万トン(22.5%)、米国 46.2 万トン(12.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、消費量の引下げ等を受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 124.8 百万トンとなるものの、前年度と比べ 2.3%減となる見込み。

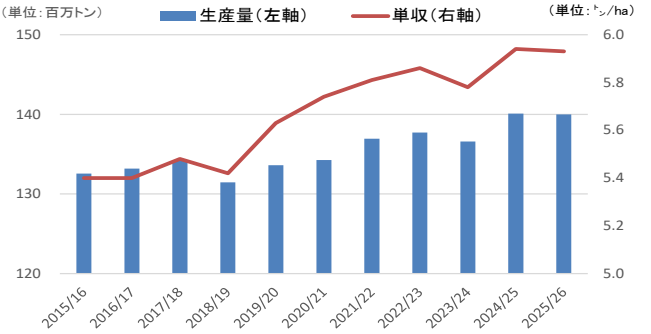
小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.6	140.1	140.0 (140.0)	▲ 2.0	▲ 0.1
消 費 量	153.5	150.0	148.0 (147.3)	▲ 2.0	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0 (28.0)	▲ 2.0	▲ 6.1
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 2.0
輸 入 量	13.6	4.2	6.0 (6.2)	-	43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8 (134.7)	0.2	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.7% (90.8%)	1.2	▲ 0.9

(参考)
収穫面積(百万ha) 23.63 23.59 23.60 (23.65)
単収(t/ha) 5.78 5.94 5.93 (5.92) ▲ 0.09 ▲ 0.2
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 中国の小麦生産量・単収の推移



資料:USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦の輸入量と輸入先国

(輸入量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
豪州	503.5	37.7	カナダ	185.9	48.1
カナダ	307.6	23.0	豪州	87.1	22.5
フランス	230.1	17.2	米国	46.2	12.0
米国	181.8	13.6	カザフスタン	30.8	8.0
カザフスタン	66.8	5.0	ロシア	29.7	7.7
ロシア	42.9	3.2	日本	4.9	1.3
その他	3.9	0.3	その他	1.5	0.4
合計	1,336.5	100.0	合計	386.1	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU、セルビア等で下方修正されたものの、米国、ウクライナ、カナダ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

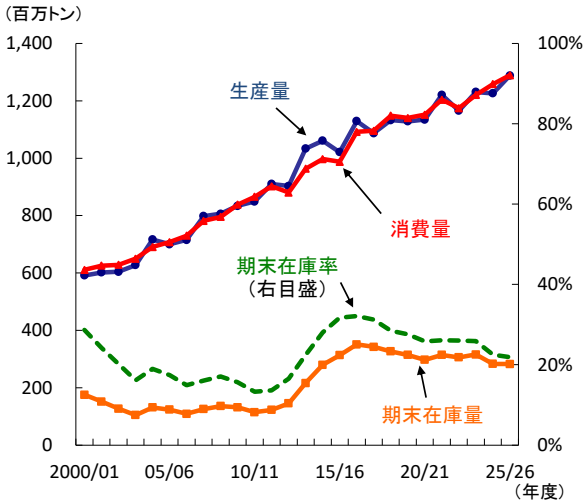
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、エジプト、メキシコ、トルコ、コロンビア、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・セルビア、EU等で下方修正されたものの、米国、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



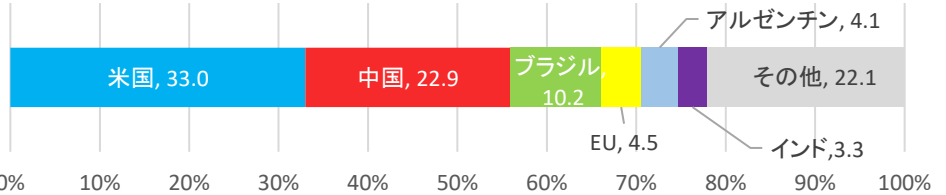
◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

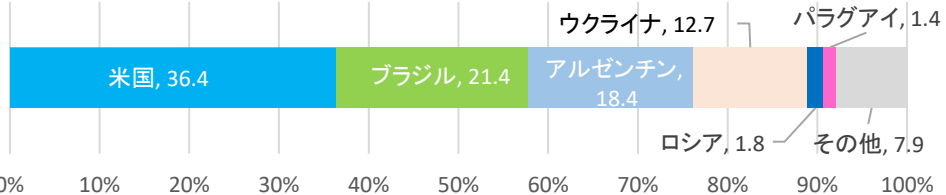
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,230.7	1,226.0	1,288.6	24.9	5.1
消 費 量	1,220.6	1,258.6	1,289.2	13.4	2.4
うち飼料用	769.7	786.3	811.2	10.2	3.2
輸 出 量	192.6	193.6	200.9	5.1	3.7
輸 入 量	197.5	183.6	192.2	4.4	4.7
期末在庫量	315.7	283.1	282.5	10.5	▲ 0.2
期末在庫率	25.9%	22.5%	21.9%	0.6	▲ 0.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2025)

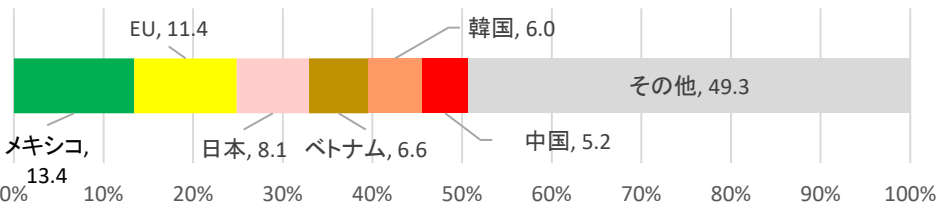
○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,288.6 百万トン) (単位: %)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸出量 (200.9 百万トン) (単位: %)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸入量 (192.2 百万トン) (単位: %)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、収穫面積及び単収が増加する見通しを受け、前月予測から 26.3 百万トン上方修正され、前年度より 12.6%増の 425.3 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。

同「Crop Progress」(2025.8.11)によれば、8月 10 日現在、とうもろこしのドウ(ミルク状の穀粒が徐々に柔らかい固まりになっていく段階)進捗率は 58%と前年同期及び過去5年平均と同水準。総じて生育に適した天候に恵まれ、作柄評価は「良～優良」の割合が 72%と、前年同期(67%)を上回った。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 8.8 百万トン上方修正され、飼料消費の増加等により、前年度比 4.4%増の 332.3 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 5.1 百万トン上方修正され、前年度より 2.0%増の 73.0 百万トンと、史上最高の見込み。なお、2024/25 年度の輸出量は、前月予測から 1.8 百万トン上方修正され、米国産の価格競争力の高まり等により、前年度より 25.1%増の 71.6 百万トンとなる見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2024/25 年度のうち 2024 年9月～2025 年7月の輸出量は 6,163.5 万トンで、前年同期(4,778.6 万トン)より 29.0%増。輸出先国別には、メキシコ 2,000.1 万トン(32.5%)、日本 1,210.7 万トン(19.6%)、コロンビア 674.2 万トン(10.9%)の順となっている(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2025.8.12)によれば、世界的に好調な需要とブラジルの輸出鈍化を受け、主要産地の輸出価格は上昇した。8月7日現在、米国産の輸出価格は 197ドル/トンと、良好な天候見通しにより前月から3ドル/トンの上昇にとどまったものの、アルゼンチン産は前月から 10 ドル/トン上昇し 203ドル/トン、ブラジル産は前月から6ドル/トン上昇し、210ドル/トンとなった(図)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 11.6 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け、前年度から 62.2%増、過去5年平均(35.8 百万トン)から 50.3%増の 53.8 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 4.8 ポイント増の 13.3%となる見込み。

とうもろこしー米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	389.7	377.6	425.3	26.3	12.6
消 費 量	322.9	318.3	332.3	8.8	4.4
うち飼料用	148.4	144.2	155.0	6.4	7.5
エタノール用等	139.1	138.9	142.2	2.5	2.4
輸 出 量	57.3	71.6	73.0	5.1	2.0
輸 入 量	0.7	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	44.8	33.2	53.8	11.6	62.2
期末在庫率	11.8%	8.5%	13.3%	2.5	4.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.01	33.55	35.89	0.77	7.0
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.85	0.49	5.2

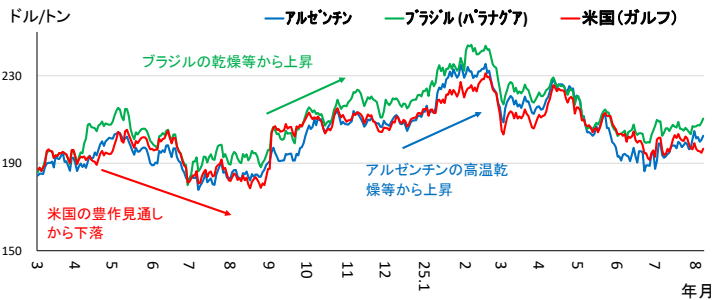
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)

表 米国のとうもろこしの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年9月～2024年8月)			2023/24年度 (2023年9月～2024年7月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
メキシコ	2,090.4	39.9	メキシコ	1,886.8	39.5	メキシコ	2,000.1	32.5
日本	1,109.2	21.2	日本	1,013.7	21.2	日本	1,210.7	19.6
コロンビア	612.1	11.7	コロンビア	551.5	11.5	コロンビア	674.2	10.9
中国	286.0	5.5	中国	285.6	6.0	韓国	570.1	9.2
韓国	234.9	4.5	韓国	234.8	4.9	台湾	227.8	3.7
その他	910.9	17.4	その他	806.3	16.9	その他	1,480.6	24.0
合計	5,243.5	100.0	合計	4,778.6	100.0	合計	6,163.5	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」
をもとに農林水産省作成

図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け、前年度より 0.8%減の 131.0 百万トンとなるものの、史上3番目の生産量となる見込み。なお、2024/25 年度の実産量は、2023/24 年度から 10.9%増の 132.0 百万トンの見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2025.8.14)によれば、2024/25 年度のとうもろこしの生産量は、主に単収の増加及び冬とうもろこしの作付面積の増加を受けて、前年度比 18.6%増の 137.0 百万トンの見込み。夏とうもろこしの生産量は、良好な気象条件及び生産技術の向上を受け、前年度比 8.6%増の 24.9 百万トンの見込み。収穫作業はほぼ完了し、作付作業が遅れて行われた地域では、7月の乾燥型の天候により穀粒の乾燥が促進された。また、冬とうもろこしの生産量は、前年度比 21.1%増の 112.1 百万トンの見込み。6月の降雨と気温の低下により穀粒の乾燥が遅れ、例年に比べ収穫の進捗が遅れていたものの、7月以降、良好な天候に恵まれ収穫作業が進展し、遅れを概ね取り戻した。冬とうもろこしも、良好な気象条件及び生産技術の向上により単収は前年度を上回ると見込まれている(図)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及びエタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより、前年度から 3.3%増の 94.0 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、主にエタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより輸出増加が抑制され、前年度同の 43.0 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～7月の輸出量は 388.5 万トンで、前年同期(530.6 万トン)と比べ 26.8%減。輸出先国別には、イラン 99.2 万トン(25.5%)、ベトナム 47.5 万トン(12.2%)、エジプト 42.2 万トン(10.9%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少及び消費量の増加を受け、前年度から 55.1%減、過去5年平均(7.0 百万トン)から 48.9%減の 3.6 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 3.3 ポイント減の 2.6%となる見込み。

とうもろこしーブラジル

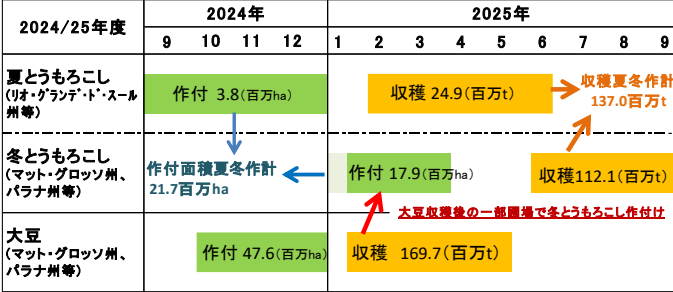
(夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～4月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)			
			予測値、() はCONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	119.0	132.0	131.0	(-)	-	▲ 0.8
消 費 量	84.0	91.0	94.0	(-)	-	3.3
うち飼料用	62.5	64.5	65.5	...	-	1.6
輸 出 量	38.3	43.0	43.0	(-)	-	-
輸 入 量	1.7	1.5	1.6	(-)	-	6.7
期末在庫量	8.5	8.0	3.6	(-)	-	▲ 55.1
期末在庫率	6.9%	6.0%	2.6%	(-)	-	▲ 3.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	21.65	22.30	22.60	(-)	-	1.3
単収(t/ha)	5.50	5.92	5.80	(-)	-	▲ 2.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
CONAB「Graos」(14 August 2025)

図 ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)



資料:CONAB「Graos」(2025.8.14)をもとに農林水産省にて作成

表 ブラジルのとうもろこしの輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～2024年7月)			2024/25年度 (2025年3月～2025年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
エジプト	601.1	15.7	エジプト	93.0	17.5	イラン	99.2	25.5
イラン	536.9	14.1	アルジェリア	71.2	13.4	ベトナム	47.5	12.2
ベトナム	450.9	11.8	ベトナム	37.1	7.0	エジプト	42.2	10.9
韓国	243.3	6.4	モロッコ	35.5	6.7	サウジアラビア	37.4	9.6
日本	214.3	5.6	サウジアラビア	32.9	6.2	モロッコ	25.6	6.6
その他	1,772.8	46.4	その他	260.8	49.2	その他	136.6	35.2
合計	3,819.4	100.0	合計	530.6	100.0	合計	388.5	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度と比べ 6.0%増、過去5年平均(49.0 百万トン)から 8.2%増の 53.0 百万トンとなる見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害が生産者の作付意欲に負の影響を及ぼしたが、被害の改善により 2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。なお、2024/25 年度の実産量は、2023/24 年度より 2.0%減の 50.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2025.8.14)によれば、8月 14 日現在の収穫進捗率は 94%で、前年同期(98%)を下回っている。州別には、コルドバ州で 100%(前年同期 100%)、サンタフェ州で 99%(同 100%)、ブエノスアイレス州で 86%(同 96%)、ラ・パンパ州で 73%(同 93%)となっている。ブエノスアイレス州とラ・パンパ州では、高い湿度が継続していることから、穀粒の自然乾燥が遅れ、収穫作業に遅れが生じている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け、前年度から 2.6%増の 15.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け、前年度より 7.2%増の 37.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～7月の輸出量は 1,702.4 万トンで、前年同期(1,763.5 万トン)より 3.5%減。輸出先国別には、ベトナム 330.0 万トン(19.4%)、ペルー 195.2 万トン(11.5%)、マレーシア 162.6 万トン(9.5%)の順となっている(表)。

アルゼンチン政府は、2025 年8月1日からとうもろこしの輸出税を 9.5%に引き下げた。また、ミレイ大統領は、今後、最終的に輸出税の撤廃を目指す方針を表明した。政府は1月にも、6月末まで期間を限定しとうもろこしの輸出税を 9.5%に引き下げていたが、7月1日以降、従来の税率である 12%に引き上げられ、報道情報によれば、国内の農業関係者からは採算の悪化を懸念する声が上がっていた。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け、前年度から 14.7%増、過去5年平均(3.1 百万トン)から 3.1%増の 3.2 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 0.5 ポイント増の 6.1%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月 に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	51.0	50.0	53.0 (59.1)	-	6.0	
消 費 量	14.6	15.2	15.6 (20.9)	-	2.6	
うち飼料用	10.4	10.8	11.2 (15.9)	-	3.7	
輸 出 量	36.3	34.5	37.0 (38.0)	-	7.2	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	2.5	2.8	3.2 (1.4)	-	14.7	
期末在庫率	4.9%	5.6%	6.1% (2.5%)	-	0.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.78	6.40	7.50 (8.22)	-	17.2	
単収(t/ha)	6.56	7.81	7.07 (7.20)	-	▲ 9.5	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年 3月～2025年 2月)			2023/24年度 (2024年 3月～2024年 7月)			2024/25年度 (2025年 3月～2025年 7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	355.1	20.1	ベトナム	330.0	19.4
ペルー	433.1	11.9	ペルー	174.7	9.9	ペルー	195.2	11.5
マレーシア	333.6	9.2	韓国	174.0	9.9	マレーシア	162.6	9.5
韓国	282.2	7.8	マレーシア	161.3	9.1	アルジェリア	159.7	9.4
アルジェリア	280.1	7.7	アルジェリア	138.2	7.8	エジプト	155.9	9.2
その他	1,628.2	44.9	その他	760.3	43.1	その他	699.0	41.1
合計	3,624.9	100.0	合計	1,763.5	100.0	合計	1,702.4	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省にて作成

写真 サンタフェ州の貯蔵施設(2025 年7月 26 日撮影)



撮影者:José Daniel Peloni

生産者組合が所有するサイロの様子。とうもろこし、大豆、ソルガム、小麦を貯蔵。新たにサイロを2基建設中であり、合計の穀物貯蔵能力は6万トンとなる。

＜ ウクライナ ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 19.4%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、収穫面積及び単収の増加を受け、高温乾燥等の影響により生産量が減少した前年度から 19.4% 増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)と比べ 4.9% 減の 32.0 百万トンとなる見込み（図）。

現地情報会社によれば、7月末現在のとうもろこしの生育ステージは、主に 13 葉期～乳熟期を迎えており、収穫を開始した地域もある。中央部の一部地域では害虫被害や生育不良、西部や北部では豪雨による倒伏被害の報告がある。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、飼料消費の増加を受け、前年度から 11.1%増の 6.3 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け、前年度から 21.4%増の 25.5 百万トンとなる見込み。

ウクライナ税関庁によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年7月の輸出量は 1,972.5 万トンと、前年同期(2,826.8 万トン)より 30.2%減。輸出先国別には、トルコ 564.7 万トン(28.6%)、イタリア 270.2 万トン(13.7%)、スペイン 240.7 万トン(12.2%)の順となっている(表)。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月6日以降、深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)に基づく関税割当を適用している。6月 30 日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、生産量の増加により、前年度から 25.0%増となるものの、ロシアの侵攻前の5か年平均(2.5 百万トン)からは 62.3%減の 1.0 百万トンの見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 0.1 ポイント増の 3.0% となる見込み。

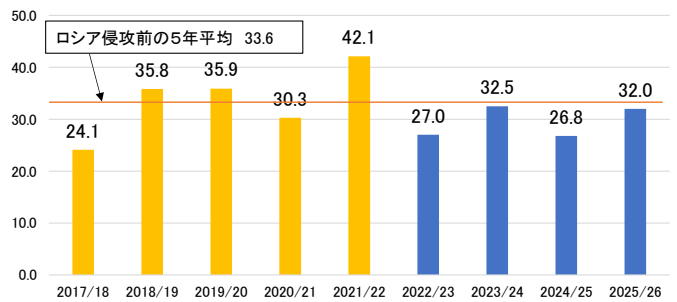
とうもろこしーウクライナ

(概ね4～5月に作付けされ、8月～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	32.5	26.8	32.0	(28.6)	1.5	19.4
消 費 量	5.4	5.7	6.3	(4.7)	0.1	11.1
うち飼料用	4.5	4.8	5.4	(3.3)	0.1	12.5
輸 出 量	29.5	21.0	25.5	(23.9)	1.5	21.4
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	▲ 50.0
期末在庫量	0.6	0.8	1.0	(0.9)	0.4	25.0
期末在庫率	1.8%	2.8%	3.0%	(3.1%)	1.0	0.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.20	4.10	4.40	(4.00)	0.20	7.3
単収(t/ha)	7.74	6.54	7.27	(7.16)	0.01	11.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 ウクライナのとうもろこしの生産量の推移 (単位:百万トン)



資料:USDA「PS&D」(2025.8.12)をもとに農林水産省にて作成

表 ウクライナのとうもろこしの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年7月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
スペイン	617.4	21.0	スペイン	609.4	21.6	トルコ	564.7	28.6
中国	461.9	15.7	中国	461.9	16.3	イタリア	270.2	13.7
エジプト	361.9	12.3	エジプト	361.3	12.8	スペイン	240.7	12.2
オランダ	277.7	9.4	オランダ	250.0	8.8	オランダ	193.7	9.8
イタリア	253.0	8.6	イタリア	233.1	8.2	エジプト	162.5	8.2
その他	975.1	33.1	その他	911.1	32.2	その他	540.7	27.4
合計	2,947.0	100.0	合計	2,826.8	100.0	合計	1,972.5	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加を受け、前年度から 0.03%増、過去5年平均(278.8 百万トン)から 5.8%増の 295.0 百万トンと、史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象週報」及び「全国農業気象影響予報及び評価」(2025.8.11)によれば、8月上旬現在、東北部では、気象条件に恵まれ作柄は良好。華北部の一部では、7月以降、高温乾燥により灌漑条件の悪い地域で生育異常が見られたものの、8月上旬にまとまった降雨に恵まれ、高温乾燥は緩和された(図)。同「作物生育期監視」(2025.8.3～8.9)によれば、東北部における春とうもろこしは主に絹糸抽出期、華北部における夏とうもろこしは主に節間伸長期～絹糸抽出期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要の増加を受け、前年度より 1.6%増の 321.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、大幅に輸入量が減少した前年度から 150.0%増の 10.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年6月の輸入量は、167.5 万トンと前年同期比 92.2%減。輸入先国別には、ブラジル 72.4 万トン(43.2%)、ウクライナ 37.6 万トン(22.4%)、ロシア 24.9 万トン(14.9%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年6月号」によれば、6月の国内価格は、前月(2,360 元/トン)から上昇し 2,420 元/トン。

中国国務院関税税則委員会は、5月 14 日以降、米国産とうもろこしに対して計 25%の追加関税を課している。8月 12 日には 90 日間停止されてきた 24%が上乗せされることとなっていたが、米中の合意により、この停止期間はさらに 90 日間延長されることとなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げを受け、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、消費量の増加を受け、前年度より 8.3%減、過去5年平均(205.3 百万トン)から 13.2%減の 178.2 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 5.9 ポイント減の 55.5%となる見込み。

とうもろこしー中国

(春とうもろこしは、概ね2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

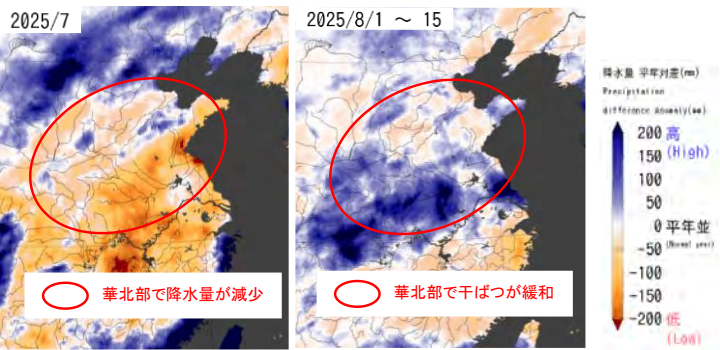
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	288.8	294.9	295.0 (299.5)	-	0.03	
消費量	307.0	316.0	321.0 (313.2)	-	1.6	
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (211.0)	-	2.1	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	23.4	4.0	10.0 (8.0)	-	150.0	
期末在庫量	211.3	194.2	178.2 (178.4)	▲ 1.0	▲ 8.3	
期末在庫率	68.8%	61.4%	55.5% (57.0%)	▲ 0.3	▲ 5.9	

(参考)

収穫面積(百万ha)	44.22	44.74	44.30 (44.90)	-	▲ 1.0	
単収(t/ha)	6.53	6.59	6.66 (6.67)	-	1.1	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 中国の降水量年平対差(2025 年7月及び8月1日～15 日)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 中国のとうもろこしの輸入量と輸入先国

(輸入量:万トン、シェア:%)

2023/24 年度 (2023年10月～2024年 9 月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年 6 月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年 6 月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	1,502.3	64.4	ブラジル	1,479.6	68.7	ブラジル	72.4	43.2
ウクライナ	456.5	19.6	ウクライナ	371.7	17.3	ウクライナ	37.6	22.4
米国	298.8	12.8	米国	231.5	10.7	ロシア	24.9	14.9
ミャンマー	19.8	0.8	ミャンマー	19.7	0.9	ミャンマー	20.1	12.0
ブルガリア	18.2	0.8	ブルガリア	18.2	0.8	ラオス	6.2	3.7
ロシア	15.6	0.7	ロシア	13.2	0.6	米国	3.9	2.3
その他	21.8	0.9	その他	20.2	0.9	その他	2.3	1.4
計	2,332.9	100.0	計	2,154.2	100.0	計	167.5	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省にて作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ナイジェリア、米国で上方修正され、前月から上方修正された。
史上最高の見込み。

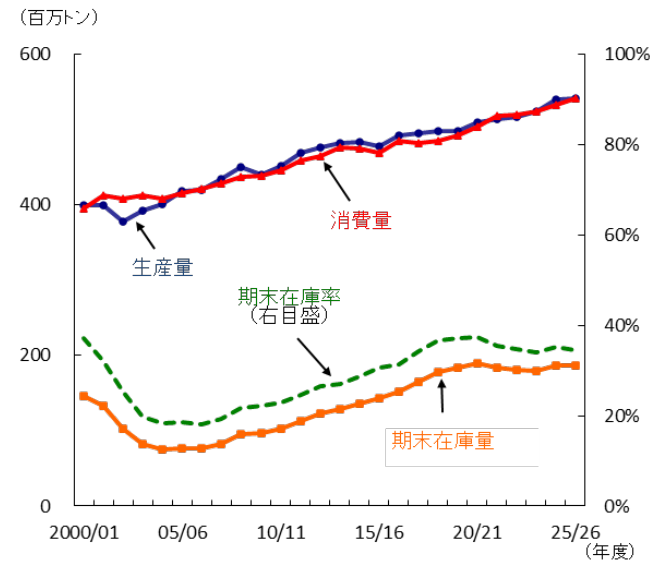
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インドネシア、フィリピン、ミャンマー、エジプト等で下方修正されたものの、ナイジェリア、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ミャンマー、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2025.8.12)をもとに農林水産省にて作成

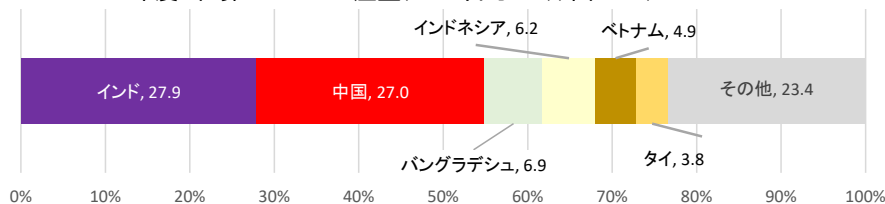
◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

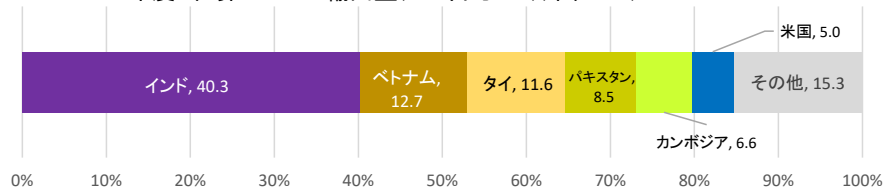
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	523.8	540.8	541.5	0.2	0.1
消 費 量	525.0	532.9	542.0	0.4	1.7
輸 出 量	56.8	61.9	62.1	0.4	0.4
輸 入 量	53.4	58.4	58.7	▲ 0.3	0.5
期末在庫量	179.3	187.2	186.7	▲ 0.6	▲ 0.3
期末在庫率	34.1%	35.1%	34.4%	▲ 0.1	▲ 0.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2025)

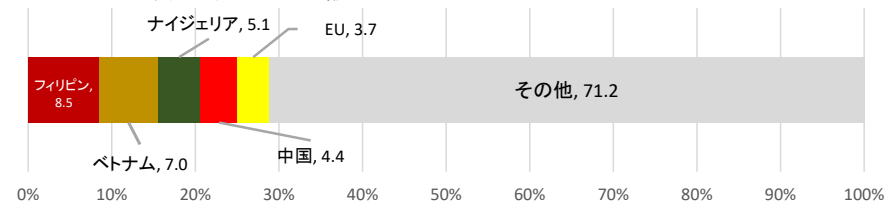
○ 2025/26年度 世界のコメの生産量(541.5百万トン)(単位:%)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸出量(62.1百万トン)(単位:%)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸入量(58.7百万トン)(単位:%)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から8万ヘクタール減少(前年度比 0.7%減)することから、前年度に比べ 0.7%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は、過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。一方、同「Grain and Feed Annual」(2025.4.4)によれば、2025/26 年度の実産量は、乾季米の作付拡大と安定した単収に支えられ、20.7 百万トンの微増と予測している。

タイ農業協同組合農業経済局「農業経済」(2025.7)によれば、2025/26 年度の雨季米(2025 年5月～10 月作付け)の作付面積は、前年度(992 万ヘクタール)から微減の 991 万ヘクタールとなる見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.7.22)によれば、7月 13 日から 19 日の間、タイの大部分及び周辺地域では、モンスーンの影響で 25～100 ミリ(一部地域では 100 ミリを超える)に達する降雨量があり、タイ北東部(天水稲作地域)では、灌漑用水を含め十分な水分が確保された(図)。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.7)によれば、雨季米は現在、分けつ期を迎え、作付面積は、国際市場におけるコメ価格の下落を受け、わずかに減少する見込み。作付進捗率は約 70%。5～7月の降雨により、十分な作付用の水分供給があったことから、生産量は、前年度に比べ増加すると予測している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度同の 7.2 百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～6月の輸出量は、前年同期比 27.4%減の 372.9 万トンで、輸出先国別には、イラク 58.3 万トン(15.6%)、米国 43.1 万トン(11.5%)、南アフリカ 35.9 万トン(9.6%)の順となっている(表)。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は 4.7 万トンと大幅に減少し、前年同期比で 97%減となった。USDA「Grain :World Markets and Trade」(2025.8.12)によれば、イラクが、タイ白米の主要な輸出市場となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、政府の大規模備蓄計画を受け、前年度比 19.3%増の 3.7 百万トンの見込み。期末在庫率は、前月予測から 1.0 ポイント下方修正されたものの、前年度より 2.9 ポイント増の 18.7%となる見込み。

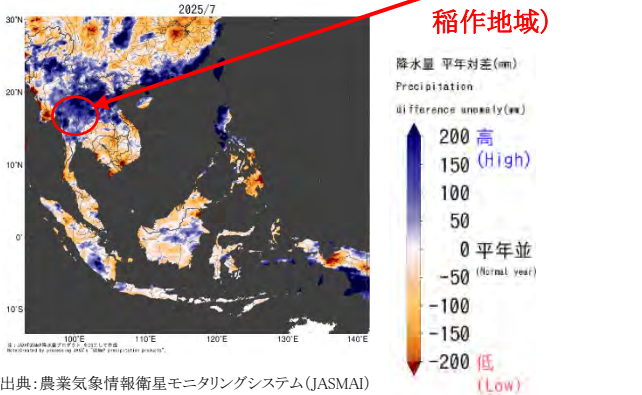
コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月～26年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	20.0	20.6	20.4 (20.4)	-	▲ 0.7	
消 費 量	12.3	12.5	12.7 (12.7)	-	1.2	
輸 出 量	9.9	7.2	7.2 (7.5)	-	-	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-	
期末在庫量	2.2	3.1	3.7 (3.3)	▲ 0.2	19.3	
期末在庫率	10.0%	15.8%	18.7% (16.5%)	▲ 1.0	2.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.65	10.88	10.80 (10.80)	-	▲ 0.7	
単収(穀t/ha)	2.85	2.86	2.86 (1.89)	-	-	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025) (単収は精米t/ha)

図 タイの降水量(2025 年7月)



出典:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 タイのコメの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～12月)			2024/25年度 (2025年1月～6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
インドネシア	133.3	13.4	インドネシア	106.7	20.8	イラク	58.3	15.6
イラク	99.7	10.0	イラク	50.4	9.8	米国	43.1	11.5
米国	84.8	8.5	米国	40.1	7.8	南アフリカ	35.9	9.6
南アフリカ	83.3	8.4	南アフリカ	36.8	7.2	中国	33.2	8.9
フィリピン	61.8	6.2	フィリピン	29.4	5.7	セネガル	16.5	4.4
セネガル	46.2	4.6	コートジボワール	20.8	4.1	フィリピン	14.1	3.8
その他	485.4	48.8	その他	229.7	44.7	その他	171.9	46.1
計	994.5	100.0	計	513.9	100.0	計	372.9	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 6.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA「Rice Outlook」(2025.8.16)によれば、2025/26年度の実産量は、収穫面積が前月予測から0.04百万ヘクタールとわずかに上方修正されたことを受け、前月予測から0.1百万トン上方修正されたものの、前年度比6.1%減の6.6百万トンの見込み。種類別では、長粒種は4.9百万トンと前月予測から0.05百万トン上方修正されたものの、前年度比10.2%減の見込み。これは4～5月にかけての過度の降雨と洪水及び長粒種米の価格低下による、南部主要生産6州(アーカンソー州、カリフォルニア州、ルイジアナ州、ミシシッピ州、ミズーリ州、テキサス州)の作付面積が減少したことによる。中・短粒種は1.7百万トンと、前月予測から0.06百万トン上方修正され、前年度比8%増の見込み。これは南部生産州の作付面積減をカリフォルニア州の作付面積増が相殺したことによる。同州において作付面積が増加した要因として、作付けに適した天候が続いたこと、また同州農家が、他の南部生産州よりも作付けの選択肢が限られていることがあげられている。

同「Crop Production」(2025.8.12)によれば、2025/26年度の実収穫面積は、1.11百万ヘクタールで、前年同期比4.3%減。種類別の収穫面積は、長粒種は、アーカンソー州等で減少し、8.5%減の0.83百万ヘクタール。中・短粒種は、カリフォルニア州、ルイジアナ州等で増加し、9.3%増の0.27百万ヘクタール。中・短粒種の主要生産地であるカリフォルニア州では、前年度に比べ14.1%増の0.21百万ヘクタールの見込み。

同「Crop Progress」(2025.8.11)によれば、8月10日現在、主要生産6州の出穂進捗率は85%。収穫進捗率は11%と前年同期(12%)並みで、過去5年平均(10%)を1ポイント上回っている。また、作柄を示す「良～優良」の割合は76%と前年同期(79%)を3ポイント下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、国内における供給増を受け、前月予測から0.03 百万トン下方修正されたものの、引き続き、タイからのジャスミン米やインド、パキスタンからのバスマティ米の輸入継続が予測され、前年度に比べ 2.6%増の 1.6 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の実輸出量は、供給増及び 2024/25 年度のイラク等向け未決済販売量の繰り越しにより、前月予測から 0.1 百万トン上方修正、前年度から 7.7%増の 3.1 百万トンの見込み。

同「Exports Sales Query System」によれば、2024/25 年度(2024 年8月～2025 年7月)の実輸出量は 291.6 万トンで、輸出先国別には、メキシコ 68.6 万トン(23.5%)、日本 39.4 万トン(13.5%)、ハイチ 28.6 万トン(9.8%)の順(表)。種類別には、長粒種は、輸出量 211.3 万トンで、輸出先国別には、メキシコ 62.2 万トン(国別シェア 29.4%)、ハイチ 28.6 万トン(同 13.5%)、ホンジュラス 27.4 万トン(同 12.9%)。中・短粒種は、輸出量 80.3 万トンで、輸出先国別には、日本 39.4 万トン(国別シェア 49.1%)、韓国 13.4 万トン(同 16.4%)、ヨルダン 6.6 万トン(同 8.2%)。

コメ・米国

長粒種の生産量が 7 割を占め、中・短粒種の生産量は3割、その内、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.9	7.1	6.6	0.1	▲ 6.1
消 費 量	4.9	5.4	5.3	0.1	▲ 1.9
輸 出 量	3.2	2.9	3.1	0.1	7.7
輸 入 量	1.4	1.5	1.6	▲ 0.03	2.6
期末在庫量	1.3	1.6	1.4	-	▲ 11.3
期末在庫率	15.8%	19.4%	16.9%	▲ 0.4	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.16	1.16	1.11	0.04	▲ 4.3
単収(粒/ha)	8.56	8.69	8.56	▲ 0.12	▲ 1.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)

写真 カリフォルニア州の水田と乾燥・貯蔵施設(7月17日撮影)



撮影者:Vicky Boyd

1930 年初頭から、同州で最も早く稲作に取り組んだ農家の1つであるヴァン・ダイク家の乾燥・貯蔵施設と隣の水田。

表 米国のコメの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	93.3	28.0	メキシコ	68.6	23.5
ハイチ	36.0	10.8	日本	39.4	13.5
日本	29.7	8.9	ハイチ	28.6	9.8
ベネズエラ	21.7	6.5	ホンジュラス	27.4	9.4
ホンジュラス	20.2	6.1	イラク	22.0	7.5
イラク	17.5	5.2	韓国	13.4	4.6
その他	114.8	34.5	その他	92.3	31.7
計	333.2	100.0	計	291.6	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、農作物の生産性向上との政府計画に沿って、作付面積が安定し単収が増加するとの予測から、前年度比 0.5%増の 146.0 百万トン(精米ベース)となる見込み。

同「Grain and Feed Update」(2025.7.2)によれば、2024/25 年度に洪水で大きな打撃を受けた早場米生産(年間コメ生産の 15%未満)に関し、2025/26 年度は、広西(コワンシー)壮族自治区、安徽省、江蘇省等のコメ生産省が、広範囲に及ぶ干ばつに見舞われ、大きな影響を受けている(図)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 0.5%増の 146.7 百万トンとなる見込み。

同「Grain and Feed Update」(2025.7.2)によれば、2025/26 年度の消費量は、とうもろこしの期末在庫量の減少を補うため、中国政府が古米備蓄を飼料及び工業用に放出する可能性が高いとのことから、前年度より増加すると予測している。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国際市場におけるコメ価格の下落と国内コメ価格の高止まりを要因として、ミャンマー、タイ、ベトナム及びインドといった伝統的なインディカ米供給国からの輸入が増加するとの予測から、前年度比 11.1%増の 2.6 百万トンの見込み。(国際市場におけるコメ価格については、＜ベトナム＞の(図)を参照)

中国海関統計によれば、2024/25 年度(2024 年7月～2025 年6月)の輸入量は、233.5 万トンと前年同期(152.7 万トン)と比べ 52.9%増となっている。輸入先国別には、ミャンマー67.4 万トン(28.9%)、タイ 56.1 万トン(24.0%)、ベトナム 49.6 万トン(21.3%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 21.7%減の 0.9 百万トンの見込み。これは価格競争力の高いインドや他のアジア産米との競争と軟調な需要に基づく輸出継続が予測されるため。

2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加予測や政府の備蓄プログラム等を受け前年度比 1.0%増の 104.5 百万トンの見込み。

期末在庫率は前月予測から変更はなく、前年度比 0.4 ポイント増の 70.8%となる見込み。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)			
			予測値、〇はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	144.6	145.3	146.0 (146.0)	-	0.5	
消費量	148.1	146.0	146.7 (145.6)	-	0.5	
輸出量	1.6	1.2	0.9 (1.9)	-	▲ 21.7	
輸入量	1.5	2.3	2.6 (2.5)	-	11.1	
期末在庫量	103.0	103.5	104.5 (102.9)	-	1.0	
期末在庫率	68.8%	70.4%	70.8% (69.8%)	-	0.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00 (29.00)	-	▲ 0.03	
単収(粒t/ha)	7.14	7.15	7.19 (5.03)	-	0.6	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025) (単収は精米t/ha)

図 中国の土壤水分量(2025 年5月)

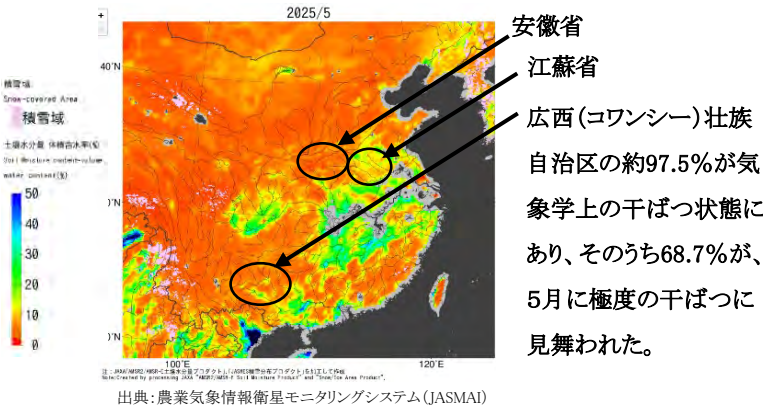


表 中国のコメの輸入量と輸入先国 (輸入量: 万トン、シェア: %)

2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ベトナム	46.1	30.2	ミャンマー	67.4	28.9
タイ	44.3	29.0	タイ	56.1	24.0
ミャンマー	36.4	23.8	ベトナム	49.6	21.3
カンボジア	12.8	8.4	インド	24.1	10.3
パキスタン	7.3	4.8	パキスタン	20.7	8.9
インド	3.0	2.0	カンボジア	11.7	5.0
その他	2.8	1.8	その他	3.8	1.6
合計	152.7	100	合計	233.5	100

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< インド > 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 0.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、151.0 百万トンと前月予測からの変更はなく、前年度比 0.7%増、過去5年平均(135.5 百万トン)と比べても 11.5%増加し、史上最高の見込み。

同「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.7.15)によれば、7月6日～12 日にかけて、インドの大部分で南西モンスーンによる降雨が続き、土壌水分を補うとともに、十分な灌漑用水が供給された。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26 年度のカリフ米の作付面積は、8月1日時点で 31.94 百万ヘクタール(前年度比 16.69%増)となっており、南西モンスーンの早期到来及び範囲の拡大が増加要因となっている。コメの主要産地である西ベンガル州(二期作地域)では、作付けが順調に進んでいる(写真)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 3.7%増の 126.5 百万トンとなる見込み。世界第2位のコメ消費国であるインドは、大量供給により4年連続で消費量増加が見込まれている。また、生産量増により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度(PDS)の継続実施が可能となっている。政府は PDS により市場からコメ等を調達し、低所得世帯(8.14 億人以上)に無償又は低価格で配給している。本年度もより多くのコメが国民に供給される見込み。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 4.2%増の 25.0 百万トンの見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」(2025.7.11)によれば、インドのパーボイルド米輸出は、規制の撤廃後、価格の下落によりサハラ以南のアフリカ及びバングラデシュへの販売が増加し、過去最高を記録する勢いにある。(国際市場におけるコメ価格については、<ベトナム>の(図)を参照)

インド輸出入統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年5月の輸出量は、1,636.0 万トンと前年同期(1,007.0 万トン)と比べ、62.5%増となっている。輸出先国別には、ベナン 153.7 万トン(9.4%)、バングラデシュ 105.2 万トン(6.4%)、サウジアラビア 102.5 万トン(6.3%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、政府備蓄米放出等により前年度に比べ 1.1%減の 45.5 百万トンとなるが、政府が望む在庫水準(13.54 百万トン)は大幅に上回る見込み。

インド食品公社(Food Cooperation India)によれば、2025 年7月時点の期末在庫量は、37.8 百万トン(精米)と前年同期比で 15.9%増の見込み。

コメーインド

カリフ米:雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。
ラビ米:冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米:3～6月に栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月～26年9月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.8	150.0	151.0 (151.0)	-	0.7
消 費 量	116.4	122.0	126.5 (124.2)	-	3.7
輸 出 量	14.4	24.0	25.0 (24.1)	-	4.2
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	42.0	46.0	45.5 (49.1)	1.0	▲ 1.1
期末在庫率	32.1%	31.5%	30.0% (33.1%)	0.7	▲ 1.5

(参考)
収穫面積(百万ha) 47.83 51.42 51.50 (51.00) - 0.2
単収(kg/ha) 4.32 4.38 4.40 (2.96) - 0.5
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025) (単収は精米t/ha)

写真 西ベンガル州の圃場(8月5日撮影)



作付後 15～16 日後のカリフ米の水田

表 インドのコメの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年5月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年5月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
サウジアラビア	136.7	9.4	サウジアラビア	101.3	10.1	ベナン	153.7	9.4
ベナン	125.0	8.6	ギニア	67.4	6.7	バングラデシュ	105.2	6.4
イラク	90.2	6.2	ベナン	66.5	6.6	サウジアラビア	102.5	6.3
ギニア	84.5	5.8	イラク	65.0	6.5	ギニア	92.2	5.6
イラン	74.0	5.1	コートジボワール	53.2	5.3	コートジボワール	88.2	5.4
コートジボワール	71.8	4.9	イラン	45.1	4.5	イラク	68.9	4.2
その他	872.1	60.0	その他	608.4	60.4	その他	1,025.3	62.7
計	1,454.2	100.0	計	1,007.0	100.0	計	1,636.0	100.0

資料:インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2025/26 年度の生産量は、前年度に比べ 2.4%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は26.3百万トンと、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少により前年度を2.4%下回る見込み。

ベトナム総統計局(2025.7.20)によれば、2025年(USDA:2024/25年度)の雨季作(ムア米)の作付面積は、全国で120.96万ヘクタールと、前年同期より1.05万ヘクタール減となった。内北部の作付面積は84.18万ヘクタールで、土地転用等により、前年同期より2.39万ヘクタール減少している。南部の作付面積は36.78万ヘクタールで、塩害の影響が軽減されたことから、前年同期比で、1.33万ヘクタール増となっている。なお、雨季作(夏秋米)の作付面積は、189.39万ヘクタールで、前値同期に比べ0.74万ヘクタール減となっている。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.7)によれば、北部では乾季米(冬春作)の収穫が終了している。単収は、天候不順と北部の一部で、病害虫や紋枯病が発生したことにより、前年度比0.7%減の約6.43トン/ヘクタールと見込まれている。一方、雨季米(夏秋作)は、作付け及びびげつ期に入り、灌漑用水が十分なことから生育は良好である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測から変更はなく、カンボジアからの粳米(国内精米用)の大量輸入継続から、前年度に比べ 2.5%増の 4.1 百万トンと、過去最高となる見込み。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はないものの、インドやタイといった輸出国との競争激化が懸念され、前年度に比べ 3.7%減の 7.9 百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～7月の輸出量は、551.0 万トンと、前年同期(532.2 万トン)に比べ 3.5%増加。輸出先国別には、フィリピン 243.9 万トン(44.3%)、コートジボワール 64.9 万トン(11.8%)、ガーナ 58.7 万トン(10.6%)の順(表)。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.8.12)によれば、ベトナム産米(長粒種、5%碎米混入)の8月8日までの週の価格は、フィリピンやアフリカへの販売増を受け、前月7月8日までの週から 16 ドル/トン上昇し 394 ドル/トンとなった(図)。2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正、前年度比 6.4%減の 2.9 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前月予測から 0.6 ポイント下方修正、前年度比 0.6 ポイント減の 9.6%となる見込み。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月～26年12月)			
			2025/26(26年1月～26年12月)		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()はIGC			
生 産 量	27.2	27.0	26.3 (28.6)		-	▲ 2.4
消 費 量	22.5	22.6	22.7 (23.0)		▲ 0.1	0.4
輸 出 量	9.0	8.2	7.9 (8.0)		-	▲ 3.7
輸 入 量	3.7	4.0	4.1 (2.6)		-	2.5
期末在庫量	3.0	3.1	2.9 (2.2)		▲ 0.2	▲ 6.4
期末在庫率	9.5%	10.2%	9.6% (7.2%)		▲ 0.6	▲ 0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.11	7.00	6.90 (7.18)		-	▲ 1.4
単収(収t/ha)	6.12	6.16	6.10 (3.99)		-	▲ 1.0

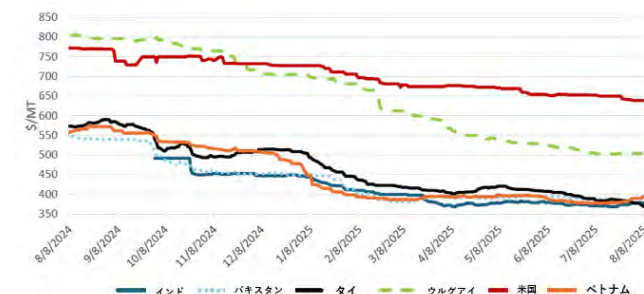
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025) (単収は精米t/ha)

表 ベトナムのコメの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～7月)			2024/25年度 (2025年1月～7月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	231.4	43.5	フィリピン	243.9	44.3
インドネシア	125.7	13.9	インドネシア	77.7	14.6	コートジボワール	64.9	11.8
マレーシア	71.9	8.0	マレーシア	52.4	9.8	ガーナ	58.7	10.6
ガーナ	61.3	6.8	ガーナ	32.9	6.2	中国	49.7	9.0
コートジボワール	48.3	5.3	コートジボワール	26.1	4.9	マレーシア	29.4	5.3
中国	28.5	3.2	中国	22.4	4.2	バングラデシュ	10.5	1.9
その他	145.5	16.1	その他	89.4	16.8	その他	93.9	17.0
計	903.4	100.0	計	532.2	100.0	計	551.0	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移 (2024 年8月8日～2025 年8月8日)



資料:USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.8.12)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

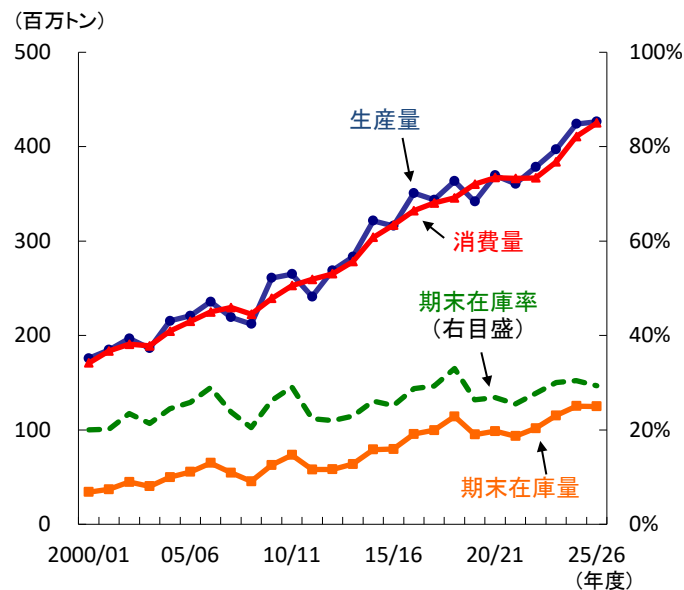
消費量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



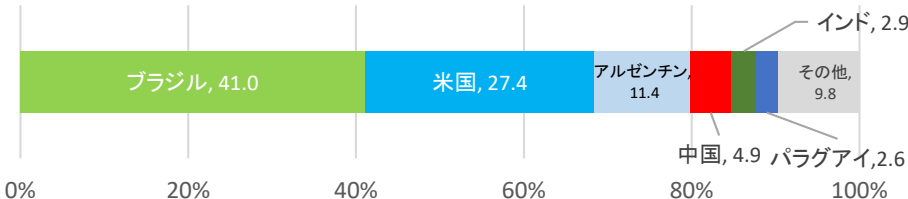
◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

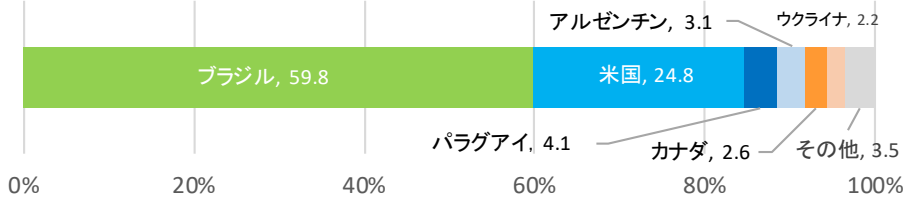
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	396.9	424.0	426.4	▲ 1.3	0.6
消 費 量	383.7	410.7	425.1	▲ 0.1	3.5
うち搾油用	331.0	354.7	367.7	—	3.7
輸 出 量	177.8	181.8	187.4	▲ 0.2	3.1
輸 入 量	178.1	178.3	185.9	▲ 0.2	4.2
期末在庫量	115.3	125.2	124.9	▲ 1.2	▲ 0.2
期末在庫率	30.1%	30.5%	29.4%	▲ 0.3	▲ 1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 August 2025)

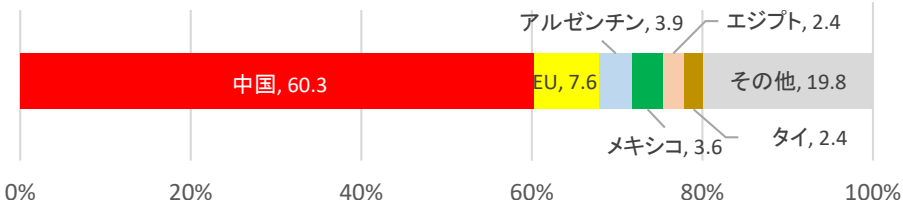
○ 2025/26 年度 世界の大豆の生産量(426.4 百万トン)(単位:%)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸出量(187.4 百万トン)(単位:%)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸入量(185.9 百万トン)(単位:%)



大豆－ブラジル

(概ね9～12月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、() は CONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	154.5	169.0	175.0 (-)	-	3.6
消 費 量	58.3	61.1	62.3 (-)	-	2.0
うち搾油用	54.4	57.0	58.0 (-)	-	1.8
輸 出 量	104.2	102.1	112.0 (-)	-	9.7
輸 入 量	0.9	0.6	0.2 (-)	-	▲ 72.7
期末在庫量	29.8	36.1	37.0 (-)	-	2.4
期末在庫率	18.3%	22.1%	21.2% (-)	-	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	46.15	47.40	48.80 (-)	-	3.0
単収(t/ha)	3.35	3.57	3.59 (-)	-	0.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
CONAB「Graos」(14 August 2025)

表 ブラジルの大豆の輸出量と輸出国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年7月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	7,820.2	75.1	中国	6,796.9	75.5	中国	6,505.2	75.2
スペイン	393.4	3.8	スペイン	302.0	3.4	スペイン	351.7	4.1
タイ	303.3	2.4	タイ	249.0	2.8	タイ	293.8	3.4
トルコ	248.4	2.9	トルコ	236.6	2.6	トルコ	182.5	2.1
イラン	180.5	1.7	イラン	160.3	1.8	イラン	146.3	1.7
その他	1,469.8	14.1	その他	1,256.6	14.0	その他	1,167.8	13.5
合計	10,415.6	100.0	合計	9,001.4	100.0	合計	8,647.3	100.0

写真 マットグロッセ州の大豆保管の様子 (2025.8.25 撮影)



撮影者:Rafael Rohenkohl

同州では豊作により穀物の貯蔵能力が不足しており、サイロと同等の品質は確保できないものの、サイロバックが広く利用されている。

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は前年度から 3.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が史上最高となり単収も増加することから、前年度より 3.6%増の 175.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、2024/25 年度の実産量は、2023/24 年度から 9.4%増の 169.0 百万トンの見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2025.8.14)によれば、2024/25 年度の実産量は、生産技術の向上及び良好な気象条件を受け、前年度(147.7 百万トン)より 14.8%増の 169.7 百万トンと史上最高の見込み。単収も 3.56 トン/ヘクタールと史上最高を記録した。なお、12 月から2月末まで干ばつの影響を受けたりオ・グランデ・ド・スール州の単収は、2.08 トン/ヘクタールとなった。収穫作業はすでに完了している。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度より 2.0%増の 62.3 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル政府は、インフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化及び農家の所得向上等が期待されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等により、前年度から 9.7%増の 112.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年 7 月の輸出量は 8,647.3 万トンと前年同期(9,001.4 万トン)に比べ、3.9%減。輸出国別には、中国 6,505.2 万トン(75.2%)、スペイン 351.7 万トン(4.1%)、タイ 293.8 万トン(3.4%)の順となっている(表)。

報道情報(2025.8.14)によれば、米中貿易摩擦のさなか、中国は、9～10 月出荷の大豆を南米から積極的に購入している。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け、前年度より 2.4%増の 37.0 百万トンと、過去5年平均(31.9 百万トン)を上回る見込み。期末在庫率は、前年度より 0.9 ポイント減の 21.2%となる見込み。

< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 6.1%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2025.8.20)によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、単収が前年度より減少すること受け、前年度(7.6 百万トン)から 6.1%減の 7.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2025」(2025.6.27)によれば、2025/26 年度の作付面積は前年度より 0.5%増の 232.2 万ヘクタールの見込み。州別には、主要生産地のオンタリオ州では、前年度より 7.4%減の 117.4 万ヘクタールとなるものの、マニトバ州では、前年度より 13.0%増の 64.8 万ヘクタール、ケベック州では前年度から 4.4%増の 44.5 万ヘクタールとなる見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.8.12)によれば、8月上旬の温暖で乾燥した天候が作物の生育を急速に促進させたが、土壌水分量が減少し、作物へのストレスを若干増加させた。大豆主要生産地のオンタリオ州では、オンタリオ湖以北で中程度の干ばつが観測された(図)。

オンタリオ州穀物生産者協会(2025.8.14)によれば、オンタリオ州では、現在多くの圃場で茎伸長期から子実肥大初期を迎えている。今月も土壌水分量が維持されれば作柄が改善される見込みだが、直近で降雨がない地域は莢の形成に影響を及ぼす可能性がある。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.01 百万トン下方修正され、飼料用需要の減少等を受け、前年度(2.5 百万トン)から 9.1%減の 2.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、前年度(5.4 百万トン)より 0.9%減の 5.4 百万トンとなる見込み。

カナダ統計局によれば、2024/25 年度のうち 2024 年8月～2025 年6月の輸出量は 514.4 万トンと、前年同期(458.8 万トン)に比べ 12.1%増。輸出先国別には、中国 103.2 万トン(20.1%)、イラン 76.5 万トン(14.9%)、アルジェリア 47.1 万トン(9.2%)の順となっている(表)。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.01 百万トン下方修正され、前年度(0.6 百万トン)から、5.4%減の 0.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度より 0.1 ポイント減の 6.9%となる見込み。

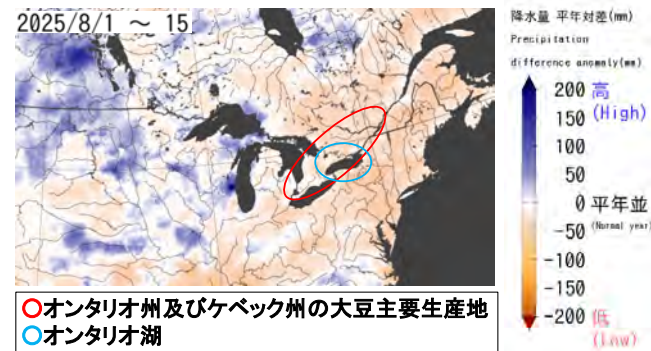
大豆－カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.0	7.6	7.0 (7.1)	-	▲ 7.5
消 費 量	2.3	2.4	2.5 (2.2)	-	4.2
うち搾油用	1.7	1.6	1.7 (1.7)	-	9.7
輸 出 量	4.8	5.3	4.8 (5.4)	-	▲ 9.4
輸 入 量	0.3	0.3	0.4 (0.5)	-	20.0
期末在庫量	0.6	0.7	0.8 (0.5)	-	8.2
期末在庫率	7.9%	9.5%	10.8% (6.9%)	-	1.3

(参考)
収穫面積(百万ha) 2.26 2.29 2.30 (2.30)
単収(t/ha) 3.09 3.30 3.04 (3.09)
資料:USDA「PS&D」,
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 August 2025)

図 オンタリオ州及びケベック州における降水量年対差



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 カナダの大豆の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)			2023/24年度 (2023年8月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年6月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	152.9	31.6	中国	152.4	33.2	中国	103.2	20.1
アルジェリア	58.2	12.0	アルジェリア	54.9	12.0	イラン	76.5	14.9
イラン	52.3	10.8	イラン	52.3	11.4	アルジェリア	47.1	9.2
日本	33.9	7.0	日本	31.0	6.8	米国	38.5	7.5
インドネシア	27.7	5.7	インドネシア	25.8	5.6	日本	35.6	6.9
米国	21.7	4.5	米国	18.3	4.0	インドネシア	26.4	5.1
その他	136.9	28.3	その他	124.2	27.1	その他	187.0	36.4
合計	483.6	100.0	合計	458.8	100.0	合計	514.4	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加を受け、前年度より 1.7%増の 21.0 百万トンとなり、史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象月報」(2025.8.5)によれば、7月には主要生産地の東北部の大部分で気象条件が良好で、順調に生育しているとみられる。同「全国農業気象週報」(2025.8.11)によれば、8月9日現在、生育に適した土壌水分量となっており、開花及び着莢に好影響を与えている。同「作物生育期監視」(2025.8.11)によれば、東北部では8月9日現在、着莢期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け、前年度より 4.8%増の 133.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、2025 年は豚肉生産量の増加に伴い、短期的に飼料用需要の増加が見込まれるものの、2034 年までの長期的な見通しでは、養豚施設の大規模化や防疫水準の向上により、飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。その一方で、飼料用大豆粕の減量への取組が本格的に進み、大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.2%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び、史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年6月の輸入量は 7,255.5 万トンと前年同期(7,137.8 万トン)に比べ、1.6%増。輸出先国別には、ブラジル 4,427.5 万トン(61.0%)、米国 2,374.1 万トン(32.7%)、アルゼンチン 198.1 万トン(2.7%)の順(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年6月号」によれば、国産大豆の在庫及び高品質大豆の供給減少により、6月の国内価格は 4,640 元/トンと、前月(4,560 元/トン)から上昇した。

中国国務院関税税則委員会は、5月 14 日以降、米国産大豆に対して計 20%の追加関税を課している。8月 12 日には 90 日間停止されてきた 24%が上乘せされることとなっていたが、米中の合意により、この停止期間はさらに 90 日間延長されることとなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け、前年度より 0.2%減の 43.4 百万トンとなるものの、過去5年平均(34.6 百万トン)を上回り、史上 2 番目の見込み(図)。期末在庫率は、前年度より 1.6 ポイント減の 32.6%となる見込み。

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.8	20.7	21.0 (21.1)	-	1.7
消 費 量	121.8	126.9	133.0 (132.9)	-	4.8
うち搾油用	99.0	103.0	108.0 (109.5)	-	4.9
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	25.0
輸 入 量	112.0	106.5	112.0 (108.5)	-	5.2
期末在庫量	43.3	43.5	43.4 (44.2)	-	▲ 0.2
期末在庫率	35.5%	34.2%	32.6% (33.3%)	-	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.50 (10.50)	-	1.6
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.00 (2.01)	-	-

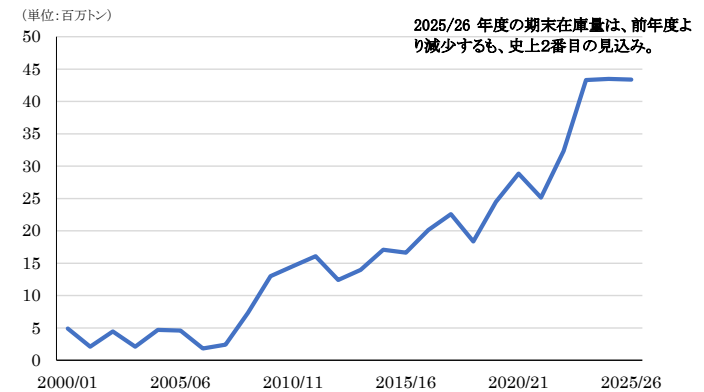
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

表 中国の大豆の輸入量と輸入先国

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年6月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	7,732.1	73.8	ブラジル	4,951.5	69.4	ブラジル	4,427.5	61.0
米国	2,091.6	20.0	米国	1,852.7	26.0	米国	2,374.1	32.7
アルゼンチン	267.7	2.6	カナダ	151.0	2.1	アルゼンチン	198.1	2.7
カナダ	151.9	1.5	ロシア	66.7	0.9	カナダ	112.7	1.6
ウルグアイ	102.7	1.0	アルゼンチン	65.7	0.9	ウルグアイ	110.6	1.5
その他	128.6	1.2	その他	50.2	0.7	その他	32.6	0.4
合計	10,474.7	100.0	合計	7,137.8	100.0	合計	7,255.5	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省にて作成

図 中国の大豆の期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.8.12)をもとに農林水産省にて作成

大豆－アルゼンチン

（早植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、3～7 月に収穫され、
遅植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、4～7 月に収穫される。）

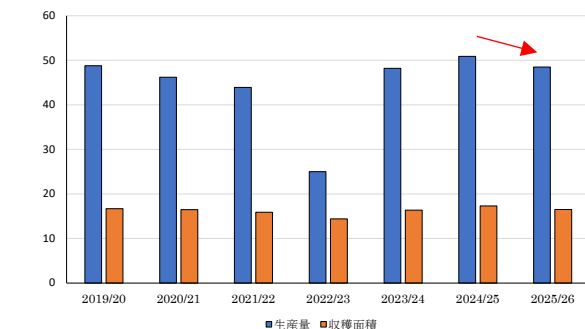
（単位：百万トン）

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	48.2	50.9	48.5 (50.5)	-	▲ 4.7	
消 費 量	43.8	50.4	50.5 (50.5)	-	0.2	
うち搾油用	36.6	42.6	43.0 (44.0)	-	0.9	
輸 出 量	5.1	6.1	5.8 (4.7)	0.8	▲ 4.9	
輸 入 量	7.8	6.8	7.2 (5.4)	-	5.9	
期末在庫量	24.1	25.3	24.7 (9.9)	▲ 0.3	▲ 2.4	
期末在庫率	49.1%	44.7%	43.8% (17.9%)	▲ 1.2	▲ 0.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.37	17.30	16.50 (17.30)	-	▲ 4.6	
単収(t/ha)	2.95	2.94	2.94 (2.92)	-	-	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 August 2025)
IGC「Grain Market Report」(17 July 2025)

図 アルゼンチン大豆の生産量と収穫面積の推移

(百万 t、百万 ha)



資料:USDA「PS&D」(2025.8.12)をもとに農林水産省にて作成

写真 サンタフェ州大豆保管の様子 (2025.7.26 撮影)



大豆は他の穀物に比べプラスチック製のサイロパックでの保管に適しているため、サイロパックには主に大豆が保管されている。

撮影者:José Daniel Peloni

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は前年度から 4.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が減少したことを受け、前年度より 4.7%減の 48.5 百万トンの見込み(図)。前年度は病害虫のヨコバイによる被害により、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により、大豆からとうもろこしに作付けがシフトする見込み。なお、2024/25 年度の実産量は、2023/24 年度から 5.6%増の 50.9 百万トンの見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2025.7.24)によれば、2024/25 年度の収穫は終了した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要が増加することから、前年度比 0.2%増の 50.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少及び搾油用需要が増加することから、前年度より 5.9%増の 7.2 百万トンの見込み。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測より 0.8 百万トン上方修正されたものの、前年度より 4.9%減の 5.8 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、2025 年1月に、6月末まで期間を限定し大豆の輸出税を 26%、大豆油及び大豆粕を 24.5%に引き下げていたが、7月1日以降、従来の税率である大豆 33%、大豆油及び大豆粕は 31%に引き上げた。報道情報によれば、政府の煮え切らない対応は、憶測を招いただけでなく、農業関係者の不満を高めていた。政府は8月1日から農業部門の競争力強化及び輸出促進等を図るため、大豆の輸出税を 26%、大豆油及び大豆粕を 24.5%に引き下げた。また、ミレイ大統領は、今後、最終的に輸出税の撤廃を目指す方針を表明した。

業界情報誌「OIL WORLD Weekly」(2025.8.1)によれば、輸出税の引下げを受け、農家による大豆の販売が加速すると予想されている。これにより、圧搾量及び輸出量の増加が見込まれている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け、前月予測より 0.3 百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け、前年度より 2.4%減の 24.7 百万トンとなるものの、過去5年平均(23.0 百万トン)を上回る見込み。期末在庫率は前年度より 0.9 ポイント減の 43.8%となる見込み。

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について（2025/26年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

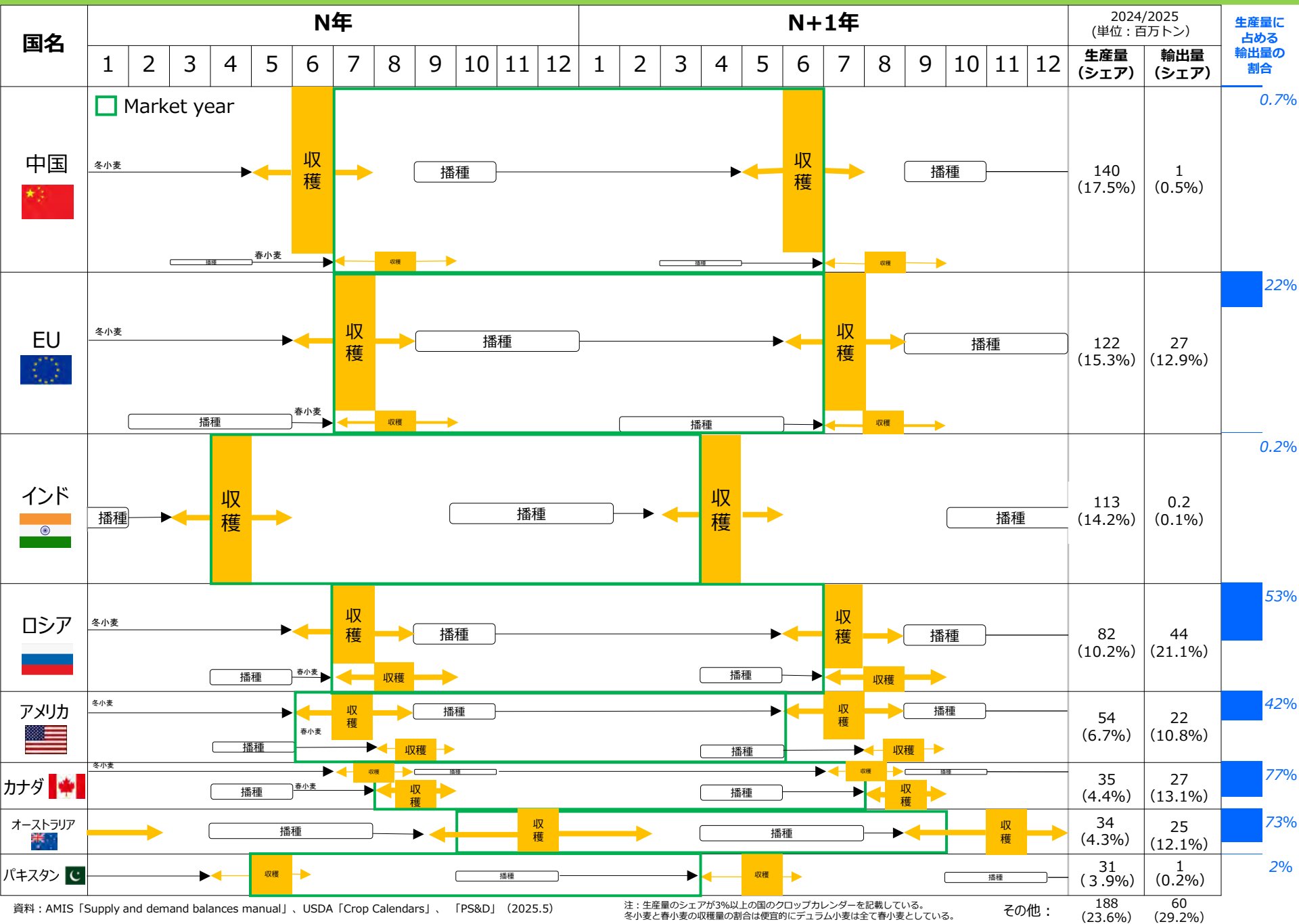
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロップカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

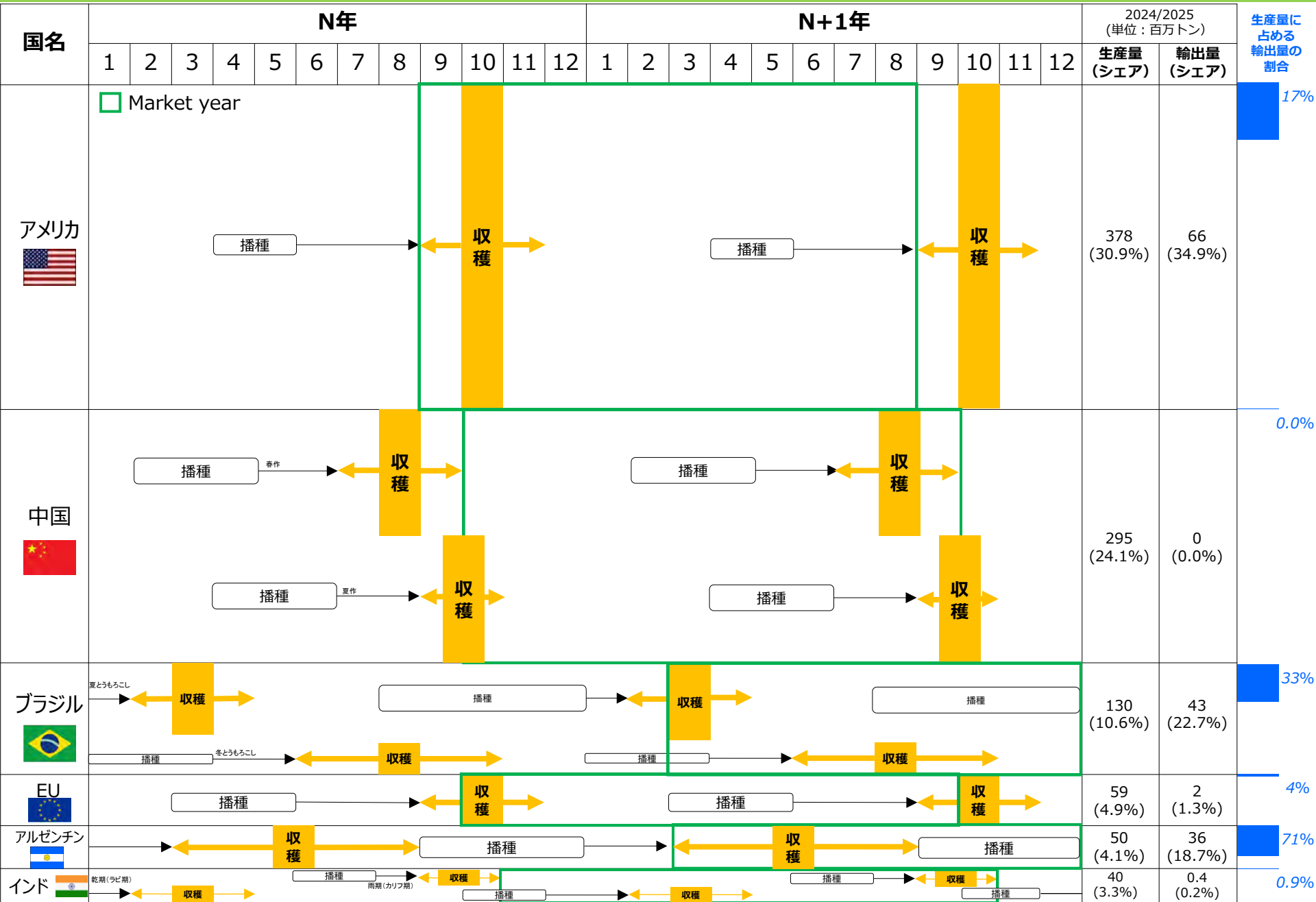


※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendar」、PS&D（2025.5） 注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他： 127 (23.6%) 21 (34.4%)

主要生産国のクロップカレンダー(とうもろこし)

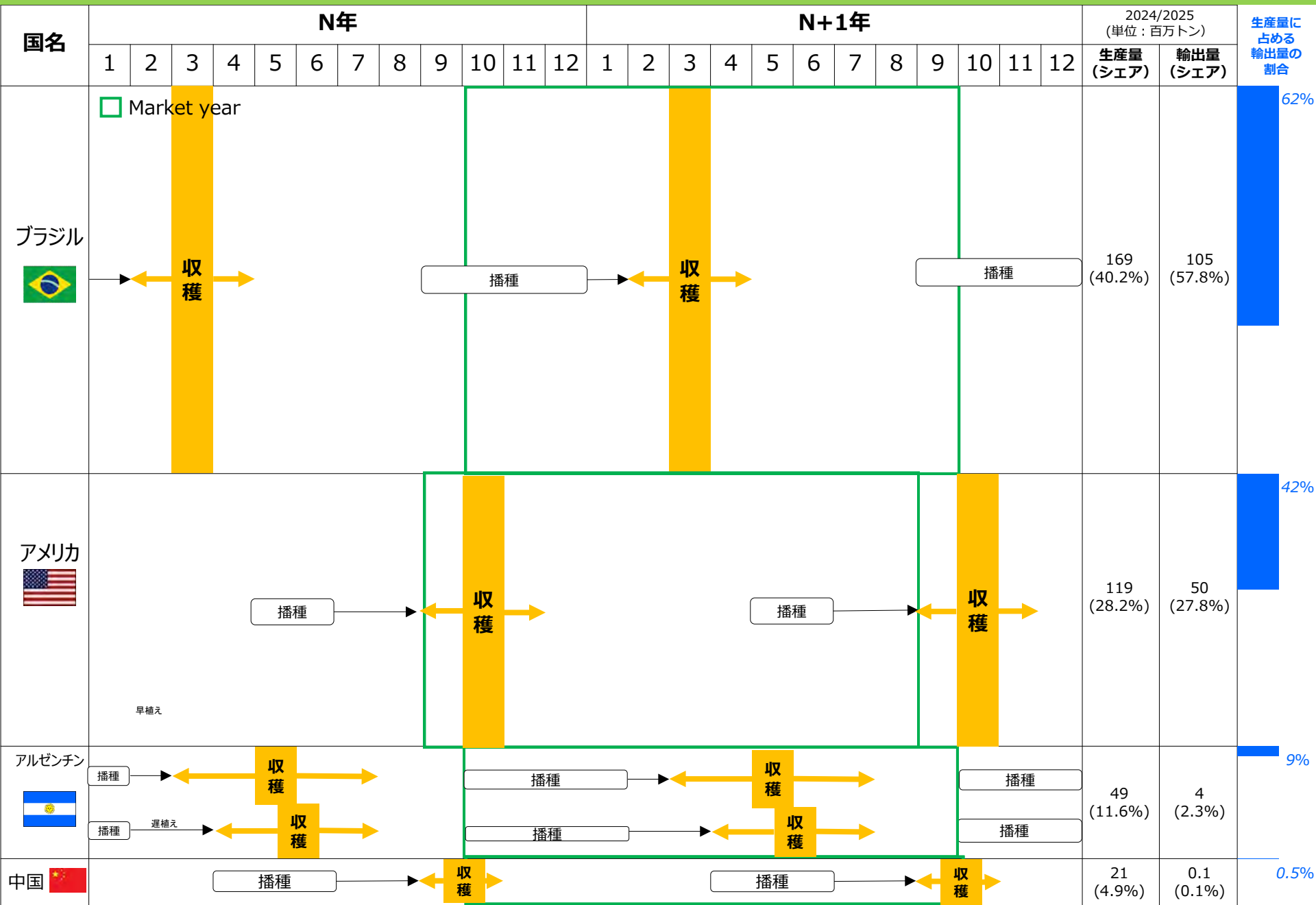
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：269 (22.1%) 42 (22.2%)

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

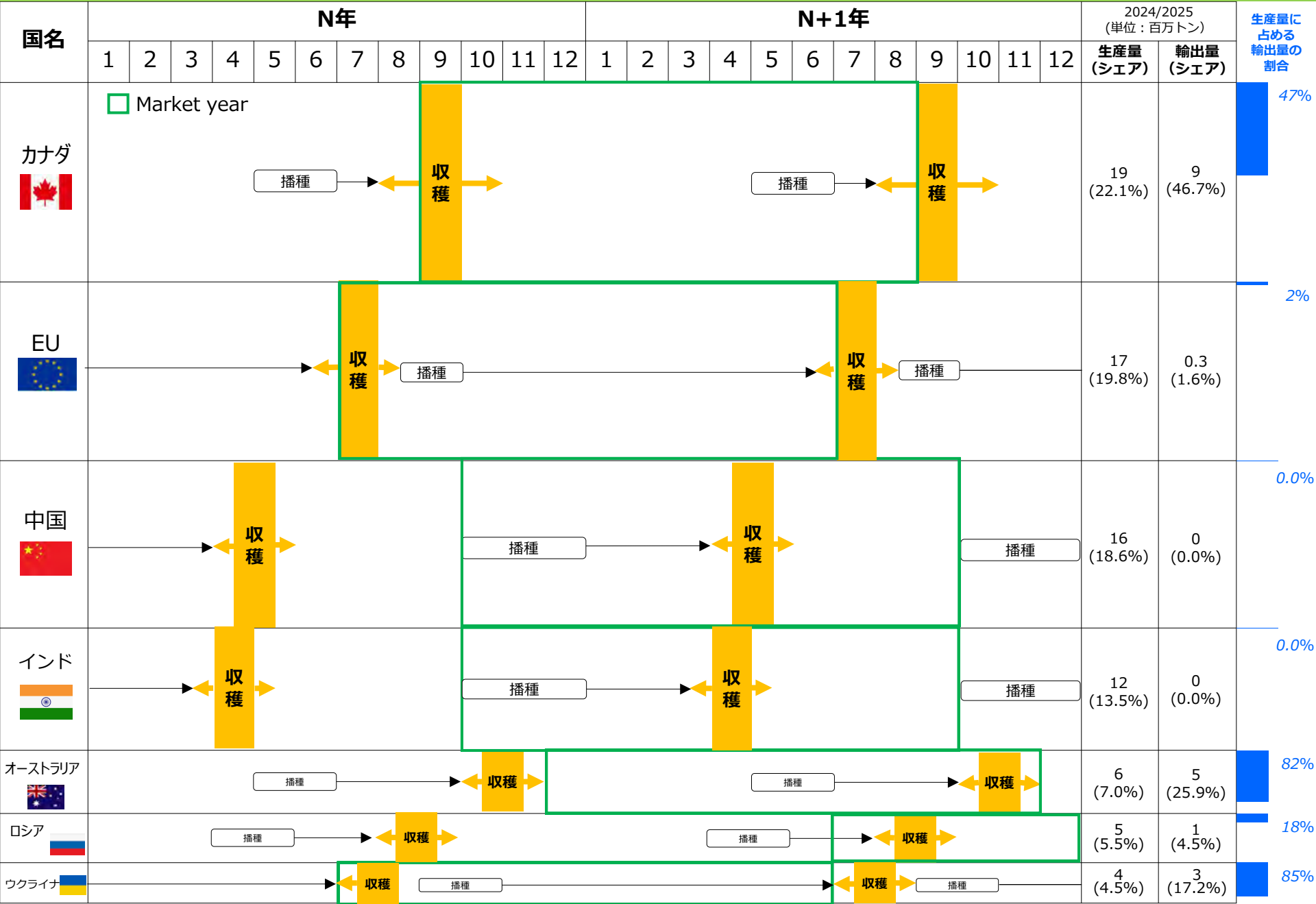


資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：

63
(15.1%)
22
(12.0%)

主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：USDA「Crop Calendar」、「PS&D」（2025.5）

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：8
(9.1%) 1
(4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
 - ・食品の価格動向：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
 - ・米に関するマンスリーレポート：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>
- イ 中・長期見通しに関する情報
- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業・水産業分野）：<https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2025 年8月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2025/26 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○ 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

